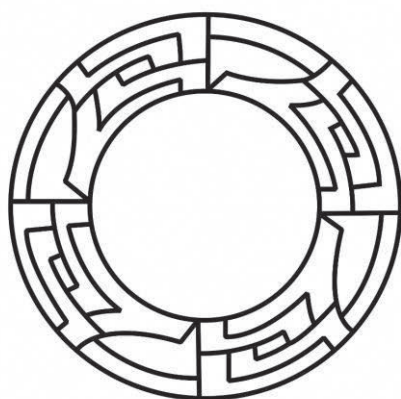


岸和田市文化賞

第 38 回
濱田青陵賞授賞式

日 時 令和 8 年 9 月 27 日（日）午後 1 時
場 所 岸和田製鋼マドカホール（市立文化会館）



岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
朝 日 新 聞 社

第 38 回 濱田青陵賞授賞式次第

◇ 表 彰

表彰状・副賞 岸和田市長

佐野 英利

副 賞 朝日新聞編集局長

龍沢 正之

◇ 祝 辞 岸和田市議会議長

友永 修

◇ 選考経過及び受賞者紹介

濱田青陵賞選考委員長

岡村 秀典

◇ 受賞者記念講演

京都大学人文科学研究所准教授

向井 佑介

受賞理由 中国の仏教寺院・都城・陵墓とその東アジア的展開についての歴史考古学研究

記念講演 仏塔はなぜ変化したか

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

◇ 記念シンポジウム

仏教寺院はどのように伝来したか

—ガンダーラから飛鳥・藤原まで—

パネリスト（順不同）

京都大学人文科学研究所准教授

向井 佑介

龍谷大学龍谷ミュージアム教授

岩井 俊平

京都府立大学文学部准教授

諫早 直人

京都国立博物館学芸部考古室長

石田由紀子

司 会

朝日新聞編集委員

中村 俊介

【 箏演奏 】 岡部 雅浪（おかべ まさなみ） 正派大師範

1974 年、正派音楽院音楽科を卒業し、唯是震一氏の門下生となる。75 年、NHK 邦楽育成会卒業。80 年、山田五十鈴主演「しぐれ茶屋おりく」に箏演奏出演。90 年には雅浪会を結成する。91 年、NHK オーディション合格。

05 年には人間国宝 鶴澤友路師と共演するなど、多方面で活躍する。濱田青陵賞では、第 5 回（1992 年）より箏演奏を手掛け、“音楽が司会者”という濱田青陵賞の伝統となっている。

【本日の箏曲名】「手事」第一楽章 作曲 宮城道雄

ご あ い さ つ

「岸和田市文化賞条例」に基づき 1988 年に制定されました「濱田青陵賞」は、考古学とその周辺諸科学の分野で活躍中の研究者を対象とする文化賞です。このたび第 38 回目を迎え、京都大学人文科学研究所准教授 向井佑介氏の研究業績に対し贈られることになりました。

ここに授賞のご報告をさせていただくと共に、皆様のご理解と、学界関係各位の多大なるご協力に対し深く感謝申し上げ、本賞が、さらなる学術文化の振興に貢献できるものとなることを祈りつつごあいさついたします。

令和 8 年 9 月 27 日

岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
朝 日 新 聞 社

【濱田青陵賞】

濱田青陵賞は、岸和田市にゆかりが深く、我が国考古学の先駆者として偉大な功績を残され、多くの後進を育成された濱田耕作（号 青陵）博士没後 50 年にあたる 1988 年に岸和田市と朝日新聞社が創設しました。

市民の誇りとして博士の業績を称えとともに、我が国考古学の振興に寄与する目的で、業績のあった新進の研究者や団体を広く選考し表彰するものです。

受賞者には岸和田市より表彰状と副賞、記念盾が、朝日新聞社より副賞が贈られます。



濱田青陵賞受賞者

回 数	氏 名	業 績	受賞当時の所属/職
第1回(1988年)	東 野 治 之	アジアの視点にたつ古代日本文化の研究	大阪大学教養部助教授
第2回(1989年)	都 出 比 呂 志	日本農耕社会の成立過程に関する研究	大阪大学文学部教授
第3回(1990年)	小 林 達 雄	縄文文化の総合的研究	國學院大學文学部教授
第4回(1991年)	青 柳 正 則	古代ローマの美術・考古学研究におけるすぐれた業績	東京大学文学部教授
第5回(1992年)	田 中 淡	中国建築史の研究	京都大学人文科学研究所助教授
第6回(1993年)	春 成 秀 爾	原始時代の社会構造とイデオロギーに関する考古学的研究	国立歴史民俗博物館教授
第7回(1994年)	千 田 稔	古代日本の歴史地理学的研究について	奈良女子大学文学部教授
第8回(1995年)	武田佐知子	服装史と日本古代国家の形成についての研究	大阪外国語大学助教授
第9回(1996年)	山 中 敏 史	古代官衙に関する考古学的研究	奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長
第10回(1997年)	菊 池 俊 彦	北の海と大地を視点として	北海道大学文学部教授
第11回(1998年)	甲 本 眞 之	東アジア新石器時代社会研究の革新	熊本大学文学部教授
第12回(1999年)	上 原 真 人	瓦と木器から日本の古代を追求する	京都大学大学院教授
第13回(2000年)	岡 村 秀 典	中国・日本の考古学を連携する研究	京都大学人文科学研究所助教授
第14回(2001年)	今 村 啓 爾	縄文文化を中心とした考古学の実証的研究と日本考古学の英文概説書による海外への紹介	東京大学大学院教授
第15回(2002年)	寺 沢 薫	考古学的成果にもとづく王権・国家形成期のすぐれた研究	奈良県教育委員会文化財保存課
第16回(2003年)	宮 本 一 夫	東北アジア文化論とその日本文化への影響の研究	九州大学大学院教授
第17回(2004年)	佐藤洋一郎	DNAを使った新しい考古学の開拓	総合地球環境学研究所教授
第18回(2005年)	中 村 慎 一	アジア稲作の起源と展開・中国文明の成立をめぐる比較研究	金沢大学文学部助教授
第19回(2006年)	福 永 伸 哉	三角縁神獣鏡と国家形成の研究	大阪大学大学院文学研究科教授
第20回(2007年)	難 波 洋 三	銅鐸の研究	京都国立博物館学芸課情報管理室室長
第21回(2008年)	関 雄 二	古代アンデス文明の形成過程とその特質に関する研究	国立民族学博物館教授・先端人類科学研究部長
第22回(2009年)	村 上 恭 通	東アジアにおける鉄と国家形成過程との有機的関係を解明した	愛媛大学教授・東アジア古代鉄器文化研究センター長
第23回(2010年)	若 狭 徹	古墳時代地域首長とその支配領域の形成過程に関する実証的研究	高崎市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係長
第24回(2011年)	松 井 章	日本考古学における動物、環境考古学の確立と国際化	国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
第25回(2012年)	小 畑 弘 己	東北アジアにおける穀物栽培過程の革新的研究	熊本大学文学部教授
第26回(2013年)	市 大 樹	考古学と木簡などの研究を重ね、古代国家の研究を大きく前進させた	大阪大学大学院文学研究科准教授
第27回(2014年)	吉 井 秀 夫	百済を中心とする朝鮮半島墳墓の研究と古代日朝関係史、朝鮮考古学の研究を進めた	京都大学大学院教授
第28回(2015年)	千 田 嘉 博	城郭の考古学的研究を新たに開拓し、その確立と発展に寄与	奈良大学学長
第29回(2016年)	下 垣 仁 志	古墳時代の王権構造の解明に大きく寄与した	京都大学准教授
第30回(2017年)	外 村 中	東洋古代の芸術文化の解明に大きく寄与した	ドイツ ヴェルツブルグ大学 東方文化研究所漢学系上級講師

第31回（2018年）	関根 達人	独自の視点と方法により考古学が中世史・近世史に大きく貢献しうることを示した。	弘前大学文学部教授
第32回（2019年）	米田 穰	同位体分析をもちいた考古科学を開拓し、その確立と発展に寄与した	東京大学総合研究博物館教授
第33回（2021年）	河上麻由子	仏教文化の視点による古代東アジアの対外交渉史の研究	大阪大学大学院文学研究科 東洋史学研究室准教授
第34回（2022年）	堀 大介	考古学に立脚した古代地域史像及び白山信仰史の学際的研究	佛教大学歴史学部歴史文化学科教授
第35回（2023年）	辻田 淳一郎	古代鏡の分析による古墳時代を中心とした考古学的研究	九州大学大学院人文科学研究院 准教授
第36回（2024年）	森 先一貴	日本旧石器時代の体系的研究とその社会的・国際的発信	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
第37回（2025年）	岩本 崇	三角縁神獣鏡を軸とする古墳編年の構築と地域史の実証的研究	島根大学法文学部社会文化学科准教授

「考古学は過去人類の物質的遺物に抛り人類の過去を研究する學」

濱田耕作『通論考古學』

濱田青陵

本名、濱田耕作。1881～1938年。東京帝国大学文学部（美術史）卒。卒業論文は「希臘的美術の東漸を論ず」。イギリスなど3年間のヨーロッパ留学の後、京都帝国大学に日本初の考古学教室を開き、近代めかつ科学的な日本考古学を教えた。国内はもちろん中国、朝鮮での発掘調査も指導・踏査を行い、さらに美術史、建築史、民俗学などにも活動の領域を広げて総合的な学風を樹立した。

また、精巧な模写、俳画に似た洒落たスケッチや旅行記、絶妙な味わいの随筆をたしなみ、温厚な人柄でも知られた。

著書に『通論考古学』、『東洋美術史研究』、『考古学研究』、『百済観音』、『橋と塔』、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』など多数の著書がある。

旧岸和田藩士の父、濱田源十郎氏は、警察官などを経て、朝日新聞社の初代会計課長。また元岸和田藩主岡部長職の三男長挙氏は、朝日新聞創業家の村山家に婿入りしており、村山長挙としてのちに朝日新聞社主となる。長挙自身、京都帝国大学の学生時代に濱田耕作宅に下宿しており、また濱田耕作も大学卒業後の一時期、朝日新聞社の美術誌『國華』の執筆、編集者となったことがある。



第 38 回 濱田青陵賞受賞者

受賞者氏名

向井 佑介（むかい ゆうすけ）

京都大学人文科学研究所 准教授



経 歴

- 1979 年 兵庫県生まれ（46 歳）
- 2002 年 大阪大学文学部考古学専攻
- 2004 年 京都大学大学院文学研究科
- 2006 年 京都大学人文科学研究所助手
- 2012 年 京都府立大学文学部講師
- 2015 年 京都府立大学文学部准教授
- 2017 年 京都大学人文科学研究所准教授
博士（京都大学 文学）
- 現 職 京都大学人文科学研究所 准教授

主な論著

- ・『シルクロード発掘 70 年 雲岡石窟からガンダーラまで』共編著（臨川書店 2008 年）
- ・「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」『佛教藝術』316 号（毎日新聞社 2011 年）
- ・「仏塔の中国的変容」『東方学報』88（京都大学人文科学研究所 2013 年）
- ・「北魏平城の瓦工房」『洛北史学』16 23-49 頁（洛北史学会 2014 年）
- ・「墓中の神坐」『東洋史研究』73-1 1-34 頁（東洋史研究会 2014 年）
- ・「華北交通写真にみる日中戦争期の史跡調査」貴志俊彦・白山真理編『京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真資料集成』論考編（国書刊行会 2016 年）
- ・「中国における双塔伽藍の成立と展開」『古代寺院史の研究』菱田哲郎・吉川真司編（思文閣出版 2019 年）
- ・『中国初期仏塔の研究』（臨川書店 2020）
- ・「仏塔と仏舎利の東伝」『アジア仏教美術論集 東アジアⅦ』（中央公論美術出版 2023 年）
- ・『馬・車馬・騎馬の考古学—東方ユーラシアの馬文化—』共編著（臨川書店 2023 年）
- ・「漢魏晋墓の神坐と墓主図像—墓のなかの〈見えるもの〉と〈見えないもの〉」『「見える」ものや「見えない」ものをあらかず—東アジアの思想・文物・藝術』（勉誠社 2024 年）
- ・“Changes in the Burial System from the Han to Chin Periods: With a Focus on Large Tombs of the Ts’ao Wei Discovered in Recent Years.” ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture (126)（東方學會 2024 年）
- ・「古代中国の墓と靈魂のまつり—前漢時代における墓と廟の変革—」『史林』107(1)（史学研究会 2024 年）
- ・「中国における唐代以前の瓦窯構造」窯跡研究会編『瓦窯の構造研究』（真陽社 2024 年）
- ・『仏塔伝来 東アジアにひろがる古代寺院』歴史文化ライブラリー633（吉川弘文館 2026 年）

【受賞理由】

第 38 回濱田青陵賞選考委員会は、令和 8 年（2026 年）5 月 29 日に開催され、厳正な審査の結果、京都大学人文科学研究所准教授の向井佑介氏を受賞者として答申しました。

「中国の仏教寺院・都城・陵墓とその東アジア的展開についての歴史考古学研究」

向井佑介さんは、大阪大学文学部で考古学を学び、京都大学大学院に進学して中国考古学の研究に着手し、在学中には北京大学へ留学しました。京都大学人文科学研究所助手に採用された後、京都府立大学文学部講師・准教授をへて京都大学人文科学研究所准教授となり、現在に至っています。

向井さんの主な研究対象は、唐代以前の中国を中心とした東アジアの仏教寺院・都城・陵墓です。外国の考古学研究は、実物に接する機会が少なく、二次資料に頼らざるをえないことが多いのですが、さいわい京都大学には中国やガンダーラの仏教寺院に関する一次資料が収蔵されており、向井さんはそれらを丹念に「掘り起こし」て精査するとともに、たびたび現地に赴いて自分の目で新資料を確かめることに努めてきました。また、職場では文献学の研究者を中心とする共同研究に参加し、漢文を読みこなす素養を身につけてきました。石刻などの同時代史料に加え、扱いのむずかしい儒教経典や漢訳仏典なども積極的に用いることで、考古資料の背後にひそむ思想とその歴史的意義を解き明かしてきました。

学位論文となった『中国初期仏塔の研究』（臨川書店、2020 年）では、インドに起源する覆鉢形のストゥーパが、中国在来の神仙思想と融合して楼阁式仏塔へと変容し、高層化していくプロセスを解明しました。北魏のみやこ平城の西に造営された雲岡石窟は、中国最初の巨石仏ですが、京都大学にはそこで発掘された瓦が多数収蔵されており、向井さんは日本考古学で培われた瓦の研究法を用いて整理し、精緻な編年を組み立てました。そのうえで近年の発掘成果と照らし合わせ、石窟の上方には高層木塔を中心とする僧院が配置され、北魏末期の『水経注』に描かれるような東西 1 km に楕円形に堂塔伽藍に発展したプロセスを明らかにしました。これは石窟寺院のイメージを塗り替える画期的な研究成果です。また、平城の北の方山には孝文帝と文明太后の陵墓や思遠仏寺などが造営されますが、向井さんは新旧の出土品を整理し、仏塔内には塑像が安置されたこと、それはインドにはじまり中国をへて法隆寺の塔本塑像などに受け継がれたことを論証しました。

このような成果を一般向けに著したのが近刊の『仏塔伝来—東アジアにひろがる古代寺院』（吉川弘文館、2026 年）です。古代の仏教寺院では単塔がふつうですが、奈良の薬師寺では双塔をもつ伽藍配置になっています。それについて向井さんは、国家仏教を

進める北魏において孝文帝・文明太后の「二聖」をシンボルとする双塔が出現し、隋・初唐には皇帝・皇后という「二聖」の双塔伽藍に継承されたことをふまえ、天武・持統朝における薬師寺の建立と鎮護国家との関連を推測しています。ひろく東アジアを俯瞰しつつ、伽藍配置という「形」に秘められた国家イデオロギーをあぶりだす、向井さんの面目躍如たる成果といえるでしょう。

漢魏洛陽城についても、向井さんは出土瓦の精緻な編年を組み立て、宮殿に関する文献史料と照合することにより、曹魏の明帝によって創建された太極殿の位置を確定させています。天空を表象する太極殿は、西晋をへて北魏の孝文帝に継承され、日本の飛鳥・藤原宮に大きな影響を及ぼしており、その成果は宮都の東アジア的展開を考えるうえで画期的な意義があります。向井さんはまた、大部の楊鴻勛著『唐長安 大明宮』（ゆまに書房、2021 年）や王其鈞著『中国庭園図解辞典』（ゆまに書房、2024 年）を若手研究者の指導を兼ねて翻訳出版し、日本の宮都や庭園の源流に関わる研究に大きな便宜を与えています。

墓と靈魂のまつりについては、儒教經典の礼書とその注釈に多くの情報があり、これまで文献学から研究されてきましたが、向井さんは宗廟と陵墓の発掘資料をもとに、先秦時代には都城内の宗廟で靈魂が祭られていたのに対して、秦漢時代には墓に死者の靈魂がとどまるという観念が生まれ、陵園の内外に「寝」や「廟」、墓室内には「神坐」という儀礼空間が設けられることを明らかにしました。また、曹操高陵や明帝のむすめ曹淑の西朱村大墓から出土した石碑（副葬品の付札）の銘文について詳細な注釈を加え、曹操とその一族墓の変遷をもとに厚葬から薄葬への展開を多角的に論証したことも特筆されます。

以上の理由から向井佑介さんを第 38 回濱田青陵賞の受賞者に選考しました。

第 38 回濱田青陵賞選考委員長 岡村秀典

第 38 回 濱田青陵賞選考委員会委員（順不同）

委員長	岡村秀典	黒川古文化研究所所長 京都大学名誉教授
委員	寺沢 薫	桜井市纏向学研究センター所長
委員	栄原永遠男	大阪公立大学名誉教授
委員	木下尚子	熊本大学名誉教授
委員	関根達人	弘前大学文学部教授

向井佑介氏記念講演要旨

仏塔はなぜ変化したか

京都大学人文科学研究所 准教授 向井 佑介

1. 濱田青陵博士の著作から

濱田青陵（耕作）博士の業績は、日本・東洋・西洋の考古学だけでなく美術史や建築史にかかわるものも少なくない。とりわけ日本の仏教美術の源流、その西方からの影響について、深い関心をもっていた。1902年に建築史家の伊東忠太が雲岡石窟を「発見」し、ガンダーラ→後魏式（北魏様式）→推古式（飛鳥様式）という流れを説いた論文を『國華』197・198号（伊東 1906）に発表した際、濱田はそれにいち早く反応して「推古時代の彫刻」と題する論考を『國華』199号に発表している（濱田 1906）。このときまだ25歳、東京帝国大学文科大学の大学院生として美術史を学んでいた時代のことである。それから3年後の1909年に京都帝国大学文科大学の講師として着任、翌1910年には内藤虎次郎・狩野直喜・小川琢治・富岡謙蔵とともに敦煌文書調査のために中国へ派遣され、その9月に小川と濱田は龍門石窟を探訪している（小川 1941）。その後、ヨーロッパ留学をへて1916年に日本最初の考古学講座を開設したことは、改めて説明するまでもない。

京都帝国大学の教授として活躍していた1926年、濱田が45歳で出版した著書のなかに『橋と塔』がある（濱田 1926）。水平の建築である「橋」（『大阪朝日新聞』1924年1月）と垂直の建築である「塔」（同1925年1月）の随筆二篇を一書にまとめたものである。その参考図版として「第二八圖 支那雲崗及龍門石窟寺塔浮彫及小塔（關野博士寫真等）」が掲載されている（図1）。関野貞は1906～1907年（第1回）と1918年（第4回）の中国調査時に大同と洛陽を訪れており、そのときの写真が含まれていると推定される。

さて、『橋と塔』のなかで濱田は「佛教建築の塔」について「日本、支那をはじめ東亞佛教國の塔は世界に於ける塔建築中最も複雑にして、且つ美的な發達を遂げたもの」として特に注目している（濱田 1926：68頁）。その特徴は「佛塔と樓閣建築との結合」にあり、「後漢の時代になつて印度から佛教と共に之に附隨する建築も東漸することゝなつた。……塔婆も漸次支那化せられ、漢六朝に發達して居つた樓閣の建築と結合して、遂に木造の多層塔が出来上るに至つた。……多層塔の頂部にある露盤、覆鉢及び相輪の部分は印度の塔其ものであつて三重、五重、九重、十三重などの部分は、實は其の下に樓閣が寄生して居るに過ぎないのである」とまとめている（濱田 1926：72～75頁）。こ

れに類似した見解は先行する関野貞の論考にもみとめられ（関野 1920・1922）、おおよそ今から 100 年前には、楼閣式仏塔の成立過程について一定の共通認識が形成されつつあったようである。

2. 楼閣式仏塔の誕生

インドのストゥーパと中国の楼閣建築とが融合した楼閣式仏塔は、後漢末には出現していたとみられる。後漢末、おおよそ西暦紀元後 180 年前後に笮融という人物が徐州で建立した仏教寺院について、『三国志』呉書・劉繇伝は「大いに浮図祠を起つ。銅を以て人を為り、黄金もて身に塗り、衣せるに錦采を以てす。銅槃九重を垂れ、下は重楼・閣道と為す。三千余人を容るべし（大起浮図祠、以銅爲人、黄金塗身、衣以錦采、垂銅槃九重、下爲重樓閣道、可容三千餘人）」と記している。それは、数層に屋根をかさねた重楼の頂部に九重の銅槃を載せた建築で、まさに日本の法隆寺五重塔や薬師寺東塔の祖型となるような楼閣式仏塔の構造が出現していたことをうかがわせる。塔内には錦の衣を着せた鍍金の仏像を安置し、周囲に回廊状の施設をめぐらせた立派な寺院であった。

こうした初期の楼閣式仏塔を表現したとみられる考古資料が、いくつか知られている。ひとつは 1986 年に四川省什邡県の後漢墓から出土した仏塔画像磚である（賀ほか 1993）。磚の側面に三重塔がならび、その間に茎のついた蓮華があらわされている（図 2）。塔は低い長方形の基壇上に建てられた方三間の建築で、最上層の屋根の頂部に相輪が載る。

もうひとつは 2008 年に湖北省襄樊市（現在の襄陽市）で発掘された菜越 1 号墓出土の陶製楼閣明器である（図 3）（襄樊市文物考古研究所 2013）。これは施釉陶器でつくられた二層の楼閣に相輪を組みあわせたものである。下層は平入りの切妻造、上層は寄棟造で、瓦葺屋根の頂上に盤踞する獣が口をひらいて相輪をくわえる。楼閣全体を築地塀が囲み、正面には門が設けられている。年代や性格には諸説があるものの、笮融が建立したという「浮図祠」がこのような建築であったと考える研究者は多い。

このように、インド由来のストゥーパは、後漢代のうちに中国固有の楼閣建築と融合し、楼閣式仏塔へと変化した。それでは、覆鉢形のストゥーパは、なぜ高層建築へと変化するならなかったのか。これについて関野貞（1920・1922）は、ガンダーラのストゥーパが数重の基壇をもつ事実に着目し、この重層基壇を木造建築に置き換えたのが中国の楼閣式仏塔だと述べている。おそらく「かたち」の上ではそれは正しい。しかし楼閣式仏塔の出現背景には、中国固有の事情もあった（水野 1936、村田 1940、向井 2020）。

すなわち、中国には仏教伝来以前から神仙思想のもとにつくられた高層建築の観や台があり、仏陀が神仙と同格視されて受容された結果、中国の仏塔は神仙をまつる観や台などと同様に高層化していったと考えられる。例えば、前漢の武帝（在位前 141～前 87

年)が建造した通天台は、神仙をまつる台の著名な例である。司馬遷『史記』封禪書によれば、神仙思想に傾倒し、不老不死をもとめた武帝に対して公孫卿は「僊人(仙人)は楼居を好む(僊人好樓居)」と伝えた。公孫卿の言をうけて武帝は、長安に蜚廉桂觀、甘泉宮に益延寿觀、さらに通天台(通天莖台)を造営して、祭祀の道具を置き、仙人や神人を招こうとした。通天台の上には承露盤や仙人掌と呼ばれる銅の造形物があつた。承露盤とは上空の露をうけるための盤で、仙人が掌を伸ばして玉杯をかかげたような形状を呈し、そこにたまった露を玉の屑と混ぜ、不老不死の薬としたらしい。このように、觀や台の上にはその性格を象徴する造形物を置くのが通例であつた。楼阁式仏塔の場合は、神仙思想の承露盤のかわりに小さな銅のストゥーパを屋根に置き、その宗教的性格を明示したのである。

3. 塔を中心とした寺院

濱田青陵の指導のもと、1929年に設立された東方文化学院京都研究所(のちの東方文化研究所、現在の京都大学人文科学研究所の前身のひとつ)において中国石窟寺院の調査と研究を推進したのが水野清一と長廣敏雄であつた。1936年の響堂山石窟と龍門石窟の調査をへて、1938~1944年に雲岡石窟の総合的調査を実現し、戦後まもなく全16巻32冊の巨大な報告書を刊行した(水野・長廣 1951~1956)。私自身の中国考古学研究は、水野らが調査した雲岡石窟の考古資料の断片から始まった(岡村編 2006)。

雲岡石窟は、北魏の沙門統曇曜が文成帝に建議して造営した石窟寺院である。北魏の都であつた平城(山西省大同市)の西にあり、おおよそ460年頃に開鑿が始まった。いうまでもなくその中心は崖面に穿たれた巨大な洞窟内の仏像や仏龕であるものの、当時は洞窟の前面や崖の上方に多数の木造建築が分布していたことがわかっている。水野らは石窟の撮影・測量・拓本とあわせて周囲の遺跡調査も実施しており、台地上では東部台上寺院址(第3窟上)と西部台上寺院址(西端諸窟上)を1940年に発掘している。それらの遺跡から出土した瓦の分析をもとに、東部台上寺院址はおおよそ470年代の造営、西部台上寺院址は480年代末から490年代初頭の造営と考えた(向井 2004・2020)。

1940年の発掘では木造建築の存在が確認されながら、その伽藍配置を明確にすることはできなかった。しかし、2010年に中国側が西部台上寺院址の一带を大規模に発掘したことにより、その伽藍配置が明らかになった(雲岡研究院ほか 2021)。それによれば、西部台上寺院址の中心をなすのは一辺14mの方形基壇の塔であり、その周囲を取りまくように回廊がめぐらされていた(図4)。塔基壇の東・西・北側から土壁で区切られた部屋の列が検出され、その内側に瓦葺の庇をかけて回廊としていたのである。こうした伽藍配置は、ガンダーラにみられる方形僧院の中庭に塔を置く伽藍配置(桑山 1974)と類似しており、西方からの影響のもとに成立した配置であつたと考えられる。

北魏ではこれと同時期に、異なる伽藍配置の寺院も存在する。平城北郊の方山において 479 年に建立された思遠寺の塔院は、門―塔―仏殿が南北にならび（図 5）、日本のいわゆる四天王寺式伽藍配置に近い（大同市博物館 2007）。この寺院が建設されたのは、当時の孝文帝の後ろ盾として絶大な権力をもった文明太后馮氏の墓である方山永固陵の前面であり、陵園に組み込まれた仏教寺院であった（岡村・向井 2007）。

同様の伽藍配置は、河南省洛陽市で発掘された永寧寺址にもみられる。北魏洛陽の永寧寺は 516 年に霊太后胡氏が宣武帝のために建立したと伝えられる。南門―塔―仏殿が南北にならび、それらを長方形の築地塼が囲む（図 6）（中国社会科学院考古研究所 1996）。各種文献史料の記載によれば、その中心をなすのは高さ一千尺（あるいはその半分）ともいわれる九重塔であった。実際に発掘された塔の基壇は一辺が 38.2m、高さ 2.2m という破格の大きさで、塔内には多数の塑像が安置された。基壇の周囲はおおよそ 100m 四方の広大な範囲にわたって地下 2.5m の深さまで掘込地業の痕跡が認められた。

2019 年には、江蘇省南京市西宮村において 5 世紀半ば、劉宋時代の創建と目される寺院が発掘され、南朝寺院の平面配置が初めて考古学的に明らかになった（龔 2022）。やはり南門―塔―仏殿の基壇が南北軸線上にならぶ配置で、南門と仏殿の左右にはそれぞれ瓦葺の回廊（あるいは軒廊）がとりつく（図 7）。

このように、現在までに発掘された 5 世紀から 6 世紀前半までの中国の仏教寺院は、ほとんどが塔を伽藍の中心に据えたものであった。なかには方形僧院の中央に塔を配した西域的な伽藍配置もあるとはいえ、その多くは塔と仏殿を南北に配置したものである。これは、周代以前から中国で伝統的につくられてきた、いわゆる四合院建築の中庭に塔を置いたものと考えられる。さらにそれは、朝鮮三国を介して日本に伝来する、飛鳥寺式や四天王寺式伽藍配置の原型といえる。

4. 舍利をどこに安置するか

ここまで、仏塔の形態や構造に注目して話を進めてきた。しかし仏塔とは本来、仏陀の舍利（釈迦の遺骨、あるいはそれに見立てたもの）を蔵するための施設である。宗教的には、仏塔に安置された仏舍利こそが重要となる。

インドのガンジス川流域には、釈迦自身の遺骨を納めた最初のストゥーパとされるものがある。ヴァイシャーリー（図 8）とピプラーワーのストゥーパがそれである。前者からは舍利らしき灰土と貝・ガラス玉・金箔・コインなどを納入した球形の滑石製容器が発掘され、後者からは釈迦（あるいはその親族）の舍利を納めた旨の銘文をもつ舍利容器などが発掘されている。ごく大雑把にいうならば、ガンジス川流域の初期のストゥーパから出土した舍利容器は一重であることが多く、舍利とともに金・銀の装飾品やビーズ・宝石・貝殻・貨幣などが埋納された。マウリヤ朝の前後にインド各地にひろが

った仏塔は、水晶・金・銀・石など各種素材の複数容器を重ねあわせて舍利を安置したものが多く、紀元前後のガンダーラではその形態がさらに多様化し、金の花形・星形装飾や各種ビーズ・宝石類をはじめとして豊富な荘厳具が加えられたことがわかっている（杉本 1984、山田 1990）。

それらの舍利はどこに安置されたか。インドやガンダーラの諸塔を集成検討した高田修の研究によれば、舍利容器は覆鉢内部にそのまま埋納されることもあれば、板石を組み合わせた石材を削り抜いたりして安置室を構築することもある（高田 1951）。覆鉢内部の地表面・基壇面に近い部分に安置されることもあれば、覆鉢の中央や上部に安置されることもある。ただし、いずれの場合も塔の中心をつらぬく刹竿に近い場所に安置されることは注意される（図 9）。

こうした状況をふまえて東アジアに目を転じると、5～6 世紀の中国北朝の塔における舍利埋納は、インドのそれと共通する要素が多いことがわかる。河北省定県で発掘された北魏太和五年（481）の舍利石函は、基壇内の土中に直接埋納されており、その位置は当時の地表面より上である（図 10）。石函内の舍利容器は銅・銀・ガラスなど異なる材質の容器を重ねたものと推定され、舍利荘厳具として金・銀の延板や花形装飾品、各種装身具類、貨幣、宝石、大量のガラス玉などが添えられていた（韓ほか 2013）。

近年、河北省臨漳県に所在する鄴城遺跡の東南で、558 年創建の北齊大莊嚴寺と推定される寺院址が発見され、大型の塔基壇の中央から石製舍利容器が発掘された（中国社会科学院考古研究所ほか 2016）。その位置は掘込地業の上面にあたり、地下の基礎工事を終えて地上の基壇を築く過程で舍利容器が安置されたと推定される。これに先だって西方の趙彭城村付近から発見されたほぼ同時期の塔址では、掘込地業の上面に大型の磚を組み合わせた磚函を構築し、さらにその上方の基壇内に心礎（塔の心柱の礎石）が安置されている状況が確認された（図 11）（中国社会科学院考古研究所ほか 2010）。これら北齊鄴城の 2 例も、塔基壇内の舍利安置場所はインドの諸例と共通している。

これらに対し、南朝の塔においては、地下深くに舍利が埋納された。南京市西營村において発掘された南朝寺院址では、一辺 18m の方形の塔基壇の中央に堅坑があり、坑の西側が階段状をなしている状況が確認された（龔 2022）。詳細は正式報告の刊行を待たねばならないが、この堅坑は基壇下層の地業を大きく掘り込んで形成されており、坑内からは舍利容器とみられる石函とガラス片のほか、金・銀の装身具や装飾品、ガラス・瑪瑙・水晶玉、銭貨などが発見された。

こうした南北朝の対比は、朝鮮半島や日本の塔の変遷を考える上で、大きな意味をもつ。百済の陵山里寺塔址では地下式心礎の上に「昌王十三年（567）」銘の舍利龕が埋納されており、心礎とは別に舍利容器を安置する中国の手法にならったものと考えられる。一方、百済の王興寺塔址では掘込地業の底面付近に据えられた大型石材の舍利孔に「丁酉年（577）」銘の舍利容器が安置されていた。王興寺塔址の舍利孔をもつ石材は心礎そ

のものではなく、心礎下方の石材とみられているものの、おそらくこれと前後する時期に舍利孔をもつ地下式心礎が出現し、その手法が飛鳥寺の塔心礎に用いられたと考えられる。また、百済や新羅では7世紀前半には舍利孔をもつ地上式心礎が出現しており、その影響は日本にも及んだ（佐川 2006）。半島南部と日本の状況は整理が進んできたものの、中国の発掘例はなお限定的であり、それらの系譜関係については今後さらなる検討が必要である。

5. なぜ複数の塔を建てるのか

最後に、伽藍配置の問題をとりあげたい。日本では塔と金堂を南北にならべた四天王寺式やそれに東西金堂を加えた飛鳥寺式が最も古く、とりわけ前者が7世紀に流行した。これらのうち、飛鳥寺式の系譜については諸説があるものの高句麗起源とする説が有力であり、四天王寺式は中国南北朝や百済・新羅において流行した。7世紀中葉には吉備池廃寺（百済大寺）において塔と金堂を並置した法隆寺式伽藍配置が出現し、さらに7世紀後葉から8世紀初めには金堂の前面に双塔を置く薬師寺式伽藍配置が成立する（図 12）。これらの新しい伽藍配置の出現背景については、従来さまざまな見解が出されてきた。仏舎利をまつる塔が伽藍の中心に置かれた飛鳥寺・四天王寺式から、塔（仏舎利）と金堂（仏像）が等しく重視された法隆寺式をへて、金堂（仏像）が伽藍の中心をなす薬師寺式へ変化し、さらに仏舎利信仰が薄れて塔が回廊外に置かれるようになったとする石田茂作説は、現在なお一定の支持を得ている（石田 1956）。

対照的に、先述の濱田青陵『橋と塔』は、薬師寺につづく奈良時代の双塔伽藍をむしろ高く評価している。四天王寺や法隆寺などの配置が「四面廻廊中に高い塔と低い金堂とがチグハグに並立して、聊か不釣合の感を抱かしめる」のに対し、「奈良時代の伽藍設計者は、（勿論唐の影響を受けたものであらうが）之に気が付いた。塔を装飾的高樓建築として充分の意義を發揮せしめる爲め、之を中門の外に出し、左右対照して東塔、西塔と名づけ、金堂を中央に移して以前の様に不釣合の観を除くことに努めたのは確かに伽藍設計上の一大進歩と言へる」と建築装飾の観点から説明した（濱田 1926：77～78 頁）。この段階の塔を完全に装飾的なものと断じることができないとしても、「唐の影響」のもとに「伽藍設計上の一大進歩」がなされたというのは、ある意味で卓見といえる。例えば、唐の高宗皇帝が662年に建造した長安の大明宮含元殿（楊 2021）は巨大な主殿の前面左右に翔鸞閣・棲鳳閣の二閣を対称配置したものであり（図 13）、こうした宮殿の出現が7世紀後半における東アジアの双塔伽藍の流行を後押ししたであろうことは想像に難くない。

文献史料の上では、東晋から南北朝の時代に、いくつかの双塔伽藍が存在したことが知られる。インドやガンダーラでは、同一寺院内に複数のストゥーパが造立されることはめずらしくないものの、主塔の周囲に多数の奉献小塔を配置するなど、主副の関係が

はっきりしていることが多い。そうした意味で、同形同大の二塔を並置する東アジアの双塔伽藍は特異であり、左右対称を重視する中国建築の伝統を反映した配置といえる。

ただ、北朝から隋唐時代の中国において流行した双塔伽藍には、共通した背景がある。例えば、北魏太和十二年（488）「大代宕昌公暉福寺碑」には、王遇が、郷里の旧宅を寄進して暉福寺を造営し、「二聖」のために「三級佛圖各一區」を建立したと記される。ここにいう「二聖」は孝文帝と文明太后馮氏であり、当時絶大な権力をふるった皇帝と太皇太后のために双塔の寺院が建立されたのである。

隋代には、仏教興隆に尽力した文帝楊堅と文献皇后独孤氏の「二聖」のため、隋大興城（唐長安城）西南隅の禪定寺に同形同大の七重塔が建てられた（『続高僧伝』釈慧乗伝）。法界尼寺には、文帝と文献皇后の発願により、高さ 130 尺の双塔（「双浮図」「連基浮図」）が造営された（『両京新記』および『舍利感応記』）。さらに、則天武后が長安懷遠坊に造営した大雲寺（大雲經寺）あるいはその前身にあたる隋文帝建立の光明寺には東西の二浮図があり、やはり双塔の寺院であったと考えられる（『両京新記』および『長安志』）。則天武后が皇帝として即位する以前には、高宗と武后が「二聖」とならび称されたという。

このように、北魏から初唐期まで、皇帝とならんで皇后（あるいは太皇太后）が大きな権力をもち、さらにその庇護のもとで仏教が隆盛した時代に、「二聖」の称があらわれる。そして、その「二聖」のため、あるいは「二聖」によって双塔の寺院が建立された。

日本の薬師寺についても同様の解釈ができるのではないか。藤原京の薬師寺は、天武天皇の 680 年に持統皇后の病氣平癒を願って造立された。過去の発掘調査とその出土遺物の研究によって、その造営順序は金堂が先行し、講堂・中門・回廊・東塔がそれに後続し、西塔は大幅におくることがわかっている。薬師如来を本尊とする金堂は、天武が崩御した 686 年には未完成で、持統天皇初期の 688 年までに完成したとみられる。したがって、金堂よりおくれる東塔の造営は主として天武崩御後に進められ、さらにおくれる西塔の造営は持統崩御後になる。こうした造営過程をふまえると、薬師寺の東塔と西塔は、それぞれ天武と持統の追福のために建立された可能性が浮かびあがる（向井 2020・2026）。

その当否はともかく、中国でも朝鮮半島でも日本でも、双塔伽藍の多くは皇室・王室の関与のもとに造営された。大規模な塔を並置する双塔伽藍の造営には莫大な費用がかかることも、現実的な理由であったかもしれない。8 世紀の唐や新羅では石塔の流行によって双塔伽藍が広く造営されるようになったとはいえ、本来は格式の高い寺院にのみ採用される伽藍配置だったのである。

参考・引用文献

(日本語)

- 岡村秀典編 2006『雲岡石窟』遺物篇 京都大学人文科学研究所
岡村秀典・向井佑介編 2007「北魏方山永固陵の研究—東亜考古学会 1939 年収集品を中心として—」『東方学報』京都第 80 冊
小川琢治 1941「序」水野清一・長廣敏雄『河南洛陽 龍門石窟の研究』座右實刊行會
桑山正進 1974「タキシラ仏寺の伽藍構成」『東方学報』京都第 46 冊
佐川正敏 2006「東アジア古代仏教寺院の木塔の構造と地下式心礎」『東北学院大学論集 歴史と文化』第 40 号
杉本卓洲 1984『インド仏塔の研究—仏塔崇拜の生成と基盤』平楽寺書店
関野貞 1920「印度の佛教藝術に就いて（西遊雜信四）」『建築雑誌』第 34 輯第 400 号
関野貞 1922「遼東の冢」『建築雑誌』第 36 輯第 427 号
高田修 1951「インドの仏塔と舍利安置法」『佛教藝術』第 11 号（1969『仏教美術史論考』中央公論美術出版所収）
濱田耕作 1906「推古時代の彫刻」『國華』第 199 号
濱田青陵 1926『橋と塔』岩波書店
水野清一 1936「六朝仏教芸術に於ける漢代の伝統」『東洋史研究』第 1 巻第 4 号
水野清一・長廣敏雄 1951～1956『雲岡石窟 西暦五世紀における中国北部仏教寺院の考古学的調査報告』全 16 巻 32 冊 京都大学人文科学研究所
宮治昭 1999『仏教美術のイコノロジー—インドから日本まで—』吉川弘文館
向井佑介 2004「中国北朝における瓦生産の展開」『史林』第 87 巻第 5 号
向井佑介 2020『中国初期仏塔の研究』臨川書店
向井佑介 2023「仏塔と仏舎利の東伝」宮治昭・肥田路美・板倉聖哲編『アジア仏教美術論集 東アジアⅦ アジアの中の日本』中央公論美術出版
向井佑介 2026『仏塔伝来—東アジアにひろがる古代寺院（歴史文化ライブラリー633）』吉川弘文館
村田治郎 1940『支那の佛塔』富山房
山田明爾 1990「インドおよび周辺の舍利容器」『佛教藝術』第 188 号
楊鴻勛著（向井佑介監訳） 2021『唐長安 大明宮』上下巻 科学出版社東京・ゆまに書房
(中国語)
大同市博物館 2007「大同北魏思遠仏寺遺址発掘報告」『文物』2007 年第 4 期
龔巨平 2022「江蘇南京西宮村南朝仏寺遺址」『大衆考古』2022 年第 3 期
韓立森・朱岩石・胡春華・岡村秀典・廣川守・向井佑介 2013「河北省定州北魏石函出土遺物再研究」『考古学集刊』第 19 集
賀雲翱・阮榮春・劉春文・山田明爾・木田知生・入澤崇 1993『仏教初伝南方之路文物図録』文物出版社
襄樊市文物考古研究所 2013「湖北襄樊樊城菜越三国墓発掘報告」『考古学報』2013 年第 3 期
雲岡研究院・山西省考古研究院・大同市考古研究所 2021『雲岡石窟山頂仏教寺院遺址発掘報告』文物出版社
中国社会科学院考古研究所 1996『北魏洛陽永寧寺 1979～1994 年考古発掘報告』中国大百科全書出版社
中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古隊 2010「河北臨漳縣鄴城遺址趙彭城北朝仏寺遺址的勘探与発掘」『考古』2010 年第 7 期
中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古隊 2016「河北臨漳鄴城遺址核桃園一号建築基址発掘報告」『考古学報』2016 年第 4 期

支那石窟寺浮彫塔婆
 (右上) 山西雲岡石窟寺
 (右下) 山西雲岡石窟寺
 (左) 河南龍門石窟寺

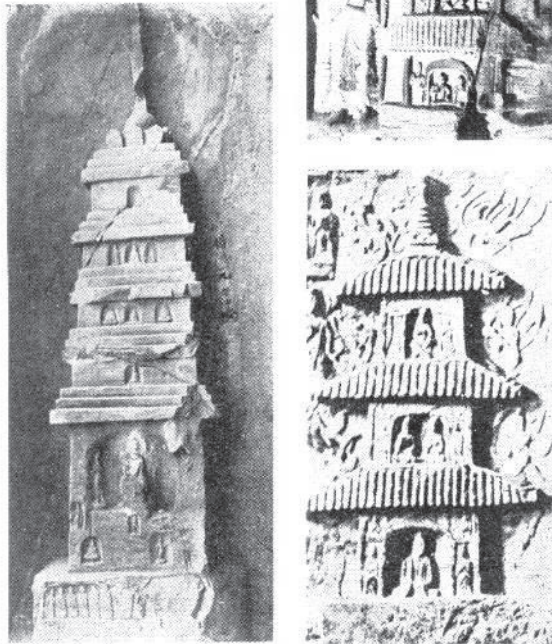


図1 濱田青陵 1926『橋と塔』：図28
 ※右下は雲岡ではなく龍門石窟古陽洞



図2 四川什邡後漢墓仏塔画像磚
 (四川博物院蔵 筆者撮影)

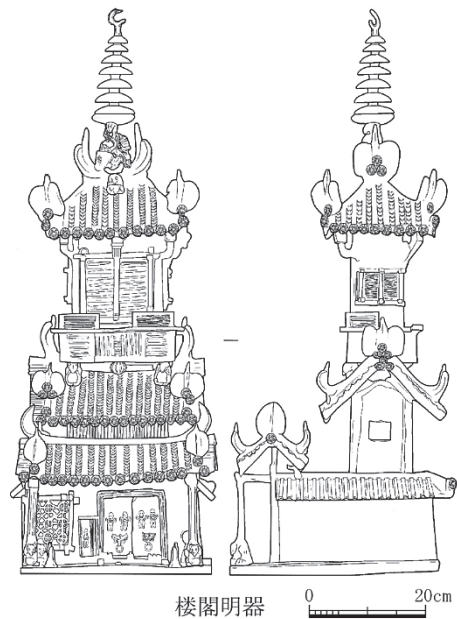


図3 湖北襄陽出土樓閣明器
 (襄樊市文物考古研究所 2013)



図4 雲岡石窟西部台上寺院址 2010年発見伽藍 (水野・長廣『雲岡石窟』附図を改変)

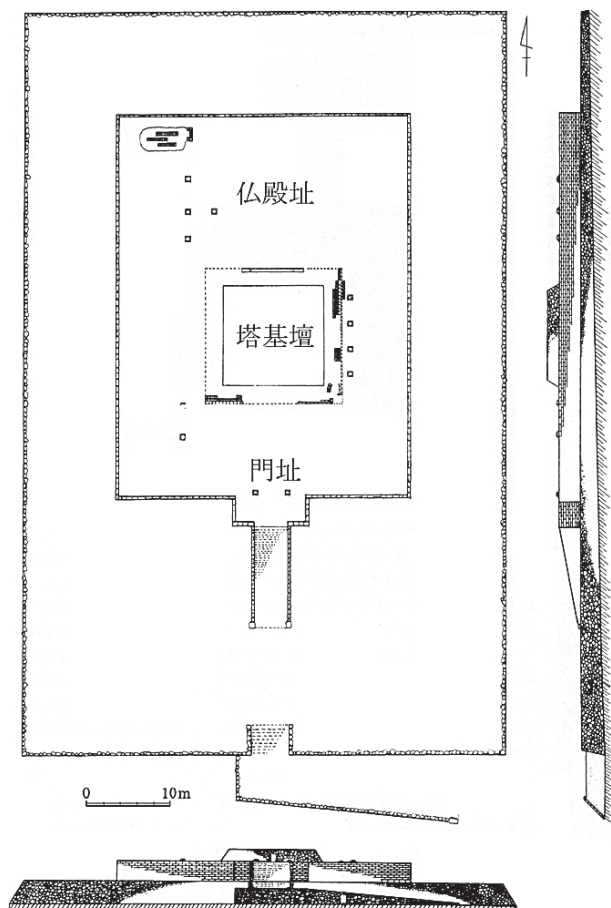


図5 北魏方山思遠寺塔院 (479年)
(大同市博物館 2007)

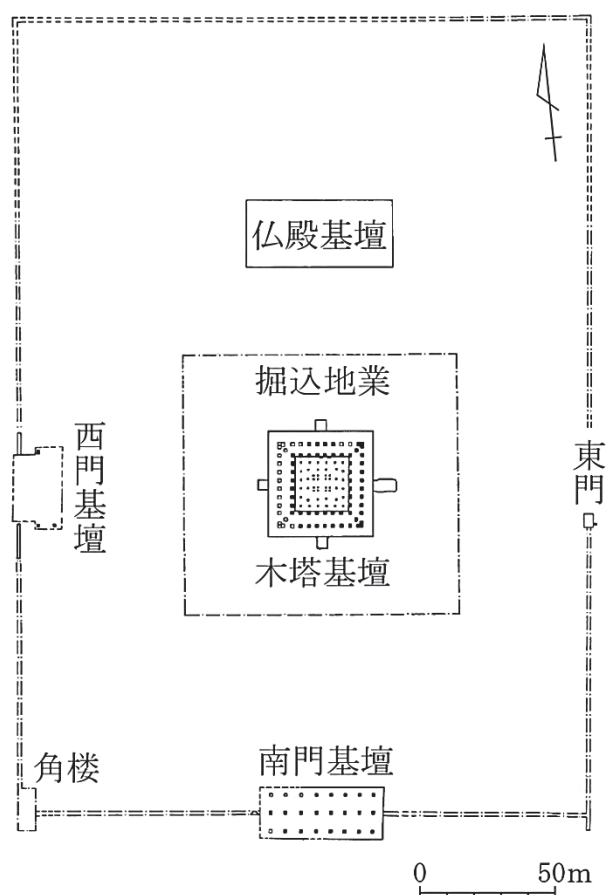


図6 北魏洛陽永寧寺伽藍配置 (516年)
(中国社会科学院考古研究所 1996)

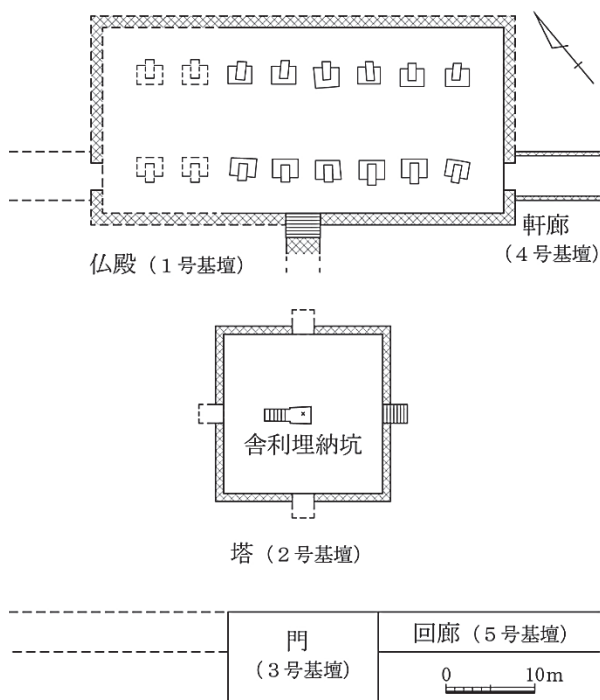


図7 南京西宮村南朝寺院址 (5世紀)
(龔 2022 報告・写真をもとに作図)



図8 ヴァイシャーリー塔 (筆者撮影)

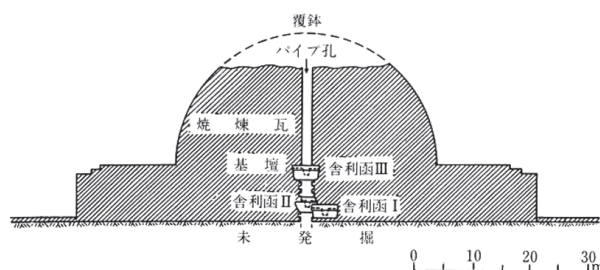


図9 バッティプロール塔 断面図
(宮治 1999)

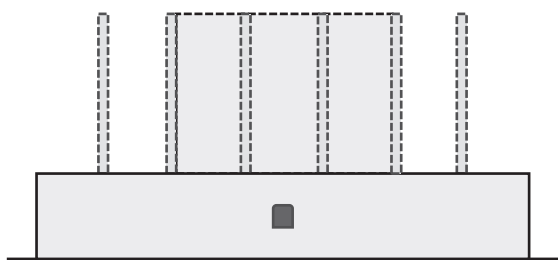


图 10 河北定県塔基 石函埋納状況
北魏太和五年（481）

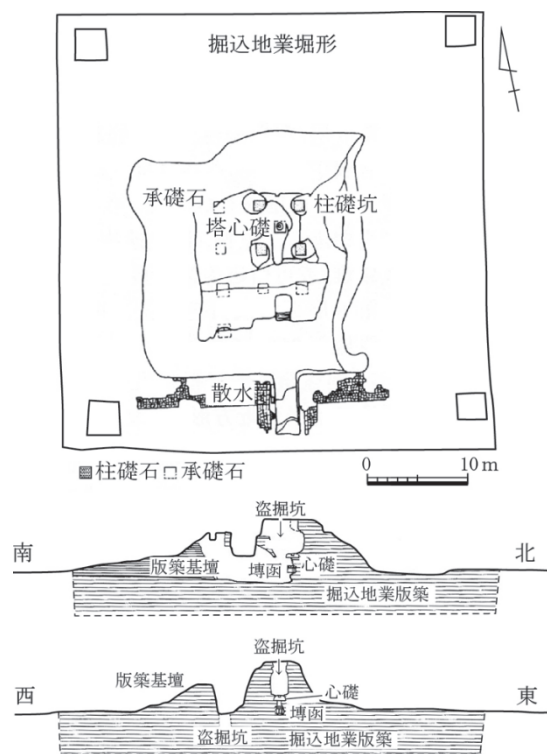


图 11 北齐鄴城趙彭城仏寺塔址
(中国社会科学院考古研究所ほか 2010)

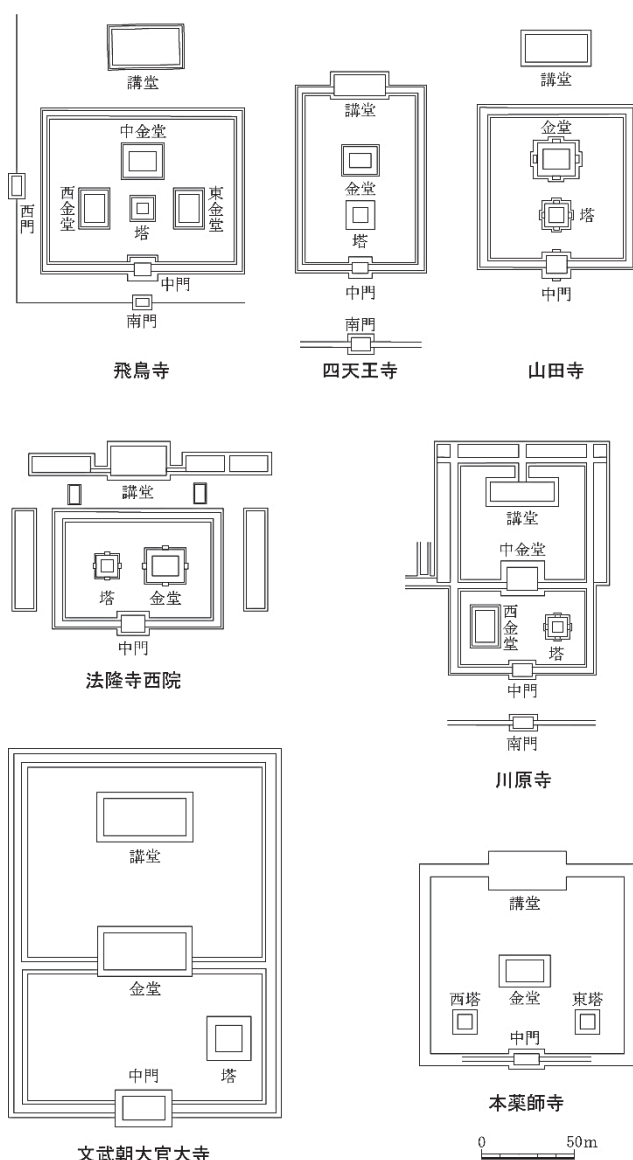


图 12 古代日本の伽藍配置

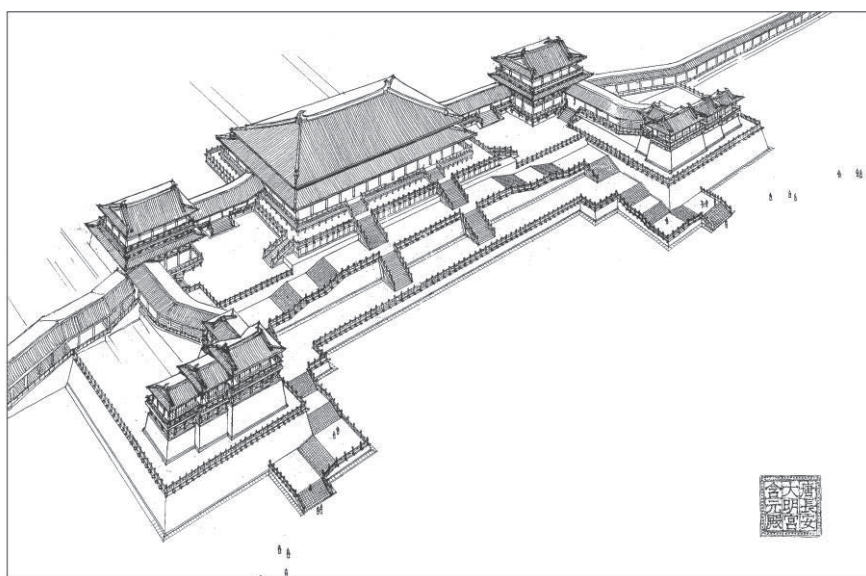


图 13 唐長安大明宮含元殿
復元図（楊 2021）



仏教寺院はどのように 伝来したか

—ガンダーラから飛鳥・藤原まで—

薬師寺の塔はなぜ2つなのか。

あの双塔を見上げてその理由を考えることをしなかった。

同様に仏教寺院が中央アジアから中国、韓半島を経て日本へ伝わったことは、
いうまでもなく理解しているつもりだった。

しかし、なぜ、どのようにと問われると答えに窮するのも事実だ。

中央アジアの仏教寺院と日本の仏教寺院では“差異”が多すぎるのだ。

でも、確実に“同じもの”が存在する。

ガンダーラから飛鳥・藤原京へ。

知っているようで知らない道をたどる。

岩井 俊平 (いわい しゅんぺい)

龍谷大学龍谷ミュージアム教授 / 考古学

Keyword : 仏教寺院 ガンダーラ 中央アジア



[略歴]

1976 年 宮城県生まれ

2004 年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程 単位取得退学

同年 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター特別研究員

2007 年 龍谷大学龍谷ミュージアム開設準備室

2010 年 龍谷大学龍谷ミュージアム 学芸員

現在 龍谷大学龍谷ミュージアム教授

[主な論著]

- ・「トハーリスターンにおける地域間関係の考古学的検討」『西南アジア研究』60 号、pp. 1-18. 2004
- ・「バクトリアにおける仏教寺院の一時的衰退」『東方学報』京都第 88 冊、pp. 422-403. 2013
- ・The Origins of the Earliest Buddhist Murals in Bāmiyān, Mural Art: Studies on Paintings in Asia, pp. 42-57. 2018
- ・「都市の廃絶と交易ルート ―クシャーン朝勃興期のバクトリアの場合―」『史林』第 105 巻第 1 号、pp. 5-27. 2022
- ・「アク・ベシム遺跡の発掘調査からみるチュー渓谷の仏教」『世界仏教文化研究論叢』第 64 号、pp. 1-18. 2026

「ガンダーラおよび中央アジアにおける仏教寺院の展開」

はじめに

インドの当初の仏教においては、在家信者たちが礼拝のために建造していたストゥーパ（仏塔）と、出家者たちが修行を行う園林などに作られた寝起きをするための施設（僧房）は、離れて存在していた。両者は、遅くとも前 2 世紀末にはセットになることがむしろスタンダードとなり、我々がイメージする「伽藍＝仏教寺院の建物群」という形になっていったと考えられる。このストゥーパは、寺院における最重要施設となり、実際に出土碑文の内容などから、ストゥーパが「生きたブッダ」そのものとして扱われていたことがわかる。中央アジア各地に仏教が伝わる際にもストゥーパは重視されていたが、その重要性の相対的な低下が認められる。以下では、この視点から中央アジアへの仏教寺院の展開を考えてみたい。

1. 広域ガンダーラの仏教寺院

(1) ガンダーラへの仏教伝来

広域ガンダーラ（現在のパキスタン北部からアフガニスタン南東部を含む地域。図1を参照）に仏教が伝わったのはアショーカ王の時代と考えられる。前3世紀後半から前2世紀にかけて、各地域にインドと同様の円形ストゥーパが建造されるようになり、その一部は増広されながら各地域の拠点的なストゥーパとなった。タキシラのダルマラージカー寺院（図2）などがその例で、徐々に周囲に建造物が建てられていく（Marshall 1951）。

(2) 後1～2世紀における大きな変化

クシャーン朝が広域ガンダーラを支配した時代（1世紀後半～3世紀第1四半期。ここでは、カニシュカ王の即位を127年頃としておく）には、インド亜大陸と西方ローマ世界が盛んに海上交易を行っていたことが『エリュトゥラー海案内記』などの文献資料から分かる。

・ストゥーパの方形基壇

こうした文化的背景のもとで、広域ガンダーラ地域では、ストゥーパ建築に大きな変化が起こった。それが、方形基壇の導入である。これまで基本的に円形の平面プランを採っていたストゥーパの最下部に、高い方形基壇を挿入するようになるのである。同時に、これまでは円形基壇の上になだらかな半球形の覆鉢部が乗る形態であったが、覆鉢部の下に何層かの円筒形部分（円胴部）も挿入され、方形基壇・円胴部・覆鉢部という構成が一般的となる（図3）。しばしばストゥーパの高層化を目指した変容とも言われるが、この時期以降に登場するストゥーパ内部の車輪状構造がローマ建築に由来することを考えれば、方形基壇も西方の建築様式の導入と捉えることが可能であろう（桑山 1990；1998）。

・方形僧房

平地の少ない狭義のガンダーラ地域（ペシャーワル盆地周辺）の仏教寺院では、小型の僧房が分散して建造されることが多かったが、比較的広い平地を確保できるタキシラ地域において、2世紀頃に大型の方形僧房が登場した（図4）。中央に広い中庭を持ち、各房室がこの中庭に面して設置される形で、その後も広域ガンダーラ地域で一般的となった（桑山 1990；Behrendt 2004）。

・仏像の登場と小型祠堂の列

後1～2世紀にかけては、ガンダーラ周辺で実践されていた仏教の内部で極めて大きな変革（新経典の創作とその書写）が起こっており、それと軌を一にして起こった（ように見える）のが「仏像の登場」であった。1世紀頃に片岩で造った石製彫刻が登場し、釈迦の生涯のさまざまなエピソードを浮彫で表現する「仏伝浮彫」が大量に制作されて、ストゥーパの外面に設置された。

また、単独の仏・菩薩像も制作されるようになると、寺院内にこれを安置する場所が必要となった。こうして生まれたのが、小型の祠堂である。これらの祠堂が、しばしばストゥーパを囲い込むように設置され、新たに「塔院」とも呼べる閉鎖的な空間を作り出す場合もあった。このように仏像の登場は、仏教寺院の構成に多大な影響を与えたのである。

・奉獻小塔の乱立

広域ガンダーラの一部の寺院では、主要なストゥーパの周辺に、多くの小型ストゥーパが建造される（図4）。これらの小塔は、寺院を荘厳するために在家信者が奉納した施設と捉えられることが多く、そのため「Votive Stupa 奉獻小塔」と呼ばれる。これはインドの仏教寺院でも広く認められる施設で、骨・灰および貴石などを収めた舍利容器が出土する事例も多く知られている。そのため、これらは一種の墓であり、世界各地で認められる「聖者の傍らへの埋葬」であるとする見解もある（ショーペン（桂訳）2007）。寺院の主ストゥーパを「生きたブッダ」そのものと捉える観念を前提とすれば納得できる解釈で、無秩序に増えていくことも説明可能である。

（3）北伝仏教の源流としてのガンダーラ

以上のとおり、1～2世紀の広域ガンダーラにおいてストゥーパの方形基壇、方形僧房、仏像を安置する祠堂が登場し、長く仏教寺院のスタンダードとなった（桑山 1990；Behrendt 2004）。3世紀以降にも仏教寺院は多く建立されるが、これほど大きな変化は認められず、その中心は最後までストゥーパであり続けた。また、後1世紀頃にこの地でスタンダードとなった書写經典と仏像のセットは、仏教の布教をかなり容易にしたはずで、クシャーナ朝が治安を維持していた当時の交易路沿いに、仏教が急速に伝播していくこととなった。この点で、広域ガンダーラの仏教こそが、北伝仏教の源流と言えるのかもしれない。

2. トハーリスターン

（1）トハーリスターンへの仏教伝播

トハーリスターン（ここでは、現在のアフガニスタン北東部とウズベキスタン南部・タジキスタン南部を含む地域としておく。図1を参照）は、中央アジアの中でも仏教が実践された中心地のひとつである。いくつかの仏教寺院址から、後1世紀に遡る古い書体のカローシュティー文字（ガンダーラ語を記述する文字）の陶片が出土しており、この時期にガンダーラから仏教が伝わったことは確実である。その後、クシャーナ朝期にかけて複数の仏教寺院が機能し、一時的な中断を挟みながらも8世紀頃まで継続した。

（2）ガンダーラとの共通性と独自性

この地域でもっとも古いカラ・テパやファヤズ・テパ仏教寺院址（図5）では、方形基壇のストゥーパが導入され、その周囲に僧房（方形僧房の場合もある）がセットで建

造されており（Fussman 2011）、ガンダーラの特徴がそのまま伝えられていることが分かる。一方で、ストゥーパ周辺に小型の祠堂を並べて「塔院」を形成する例が、クシャーン朝期に遡る寺院址では知られていない。ただし、後述するアジナ・テパなど、5世紀以降の寺院址ではこうした祠堂列が認められる場合がある。また、主ストゥーパの周囲に奉献小塔が乱立するような事例もまったく存在していない。

もうひとつの重要な違いが、ストゥーパに加え「回字形祠堂」と呼ばれる祠堂が、寺院において中心的な位置を占める場合があるということである（岩井 2019）。この祠堂は、内陣部分（ストゥーパあるいは仏像を安置する）が二重の壁で囲まれるのが特徴で、結果的に内陣の周囲を巡る通路（右繞道）が確保されることになる。カラ・テパ南丘の、石窟と地上建築を組み合わせた「コンプレクス」と呼ばれる遺構は、遺跡の中でも古い寺院址と考えられているが、多くはこの回字形を採っている（図6）。ウシュトゥルムツロでも、方形僧房の中心奥側にこの形式の部屋が作られていて、主要な役割を担っていたことが想像できる。

この形式の建造物は、アケメネス朝期の遺構にその起源を求めることが可能で（Shenkar 2011）、トハーリスターン地域でもよく似た構造の神殿が前3世紀頃から建造されている。クシャーン朝のカニシュカ王自らが建造した神殿として知られるスルフ・コートル遺跡の中核部も回字形である（Schlumberger et al. 1983）。したがって、トハーリスターン地域において、在地の信仰に関連する伝統的な神殿建築として使用されていた平面プランが、新たに到来した仏教の寺院建築の中に取り入れられた可能性が高い。しかしながら、この回字形祠堂は広域ガンダーラでも少数ながら存在しており、今後も検討が必要である。

（3）4～5世紀以降の仏教寺院址

トハーリスターンにおいて比較的新しい時期の寺院の典型的な例としては、6世紀頃に建造されたアジナ・テパを挙げることができる（Литвинский и Зеймаль 1971）。方形基壇を持つ大型のストゥーパの傍に、祠堂列および方形僧房がセットになっており、ガンダーラ的な寺院のプランが継続していることが分かる（図7）。実は、この主ストゥーパは壁で囲まれており、祠堂列や涅槃仏（復元長 12.8 m）が安置されていた空間との間に回廊が巡ることから、寺院の主たる塔院が回字形になっていると捉えることも可能である。また、カラ・テパでも5世紀以降に新たに造寺活動があり（立正大学編 2020）、古いストゥーパを増広した大型ストゥーパと祠堂列、方形僧房が認められる。これらの例では、寺院の中心は一貫してストゥーパだったことが明らかである。ガンダーラとトハーリスターンを繋ぐ位置にあり、6世紀頃から栄えたバーミヤーン遺跡においても、巨大な2体の大仏が目进行くものの、地上には大型ストゥーパが少なくとも3基存在し、ストゥーパの重要性は失われていない。

一方で、同じ時代のヒシュト・テパやカライ・カフィルニガン遺跡内の仏教祠堂のよ

うに、回字形祠堂が中心となって、ストゥーパが重要視されていない、あるいはそもそも存在していないという事例も認められる（岩井 2019）。

3. 中国西域

（1）中国西域への仏教伝播

中国西域（ここでは、現在の中国・新疆ウイグル自治区のタリム盆地周縁地域とする。図 1 を参照）も、中央アジアにおける仏教の拠点のひとつとである。ガンダーラからパミールを越えて仏教が伝わった年代については、決定的な証拠がないものの、2 世紀後半には安世高や支婁迦讖らによって漢訳経典が作られていることから、この時期までに西域を経由していたことは確実である。

（2）初期の仏教寺院遺構

西域では 1～2 世紀に遡る寺院遺構は知られていない。もっとも古いとされる寺院は西域南道沿いのニヤやローラン、ミーランなどにあり、3～4 世紀頃とされる（Rhie 1999）。ニヤでは、方形基壇を持つストゥーパの周囲に回字形祠堂や僧房と思われる建造物が散在しており、祠堂内部は木芯の存在などから何らかの尊像が祀られていた可能性が高い（Stein 1907；中日／日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編 1999）。ミーランでは、方形室の中心に砲弾型のストゥーパが安置された遺構が複数存在し、周壁にはローマ風の様式で仏教壁画が描かれていた（Stein 1921）。周囲には他のストゥーパの方形基壇や僧房と思われる遺構もあり、ストゥーパを主要な礼拝対象とするガンダーラの様相を残している。

（3）5 世紀以降の仏教寺院遺構

時代が下ると、西域には石窟寺院も含めて多くの仏教寺院遺跡が確認でき、その様相は地域ごとに極めて多様である。西域南道沿いではホータンのラワク寺院址で大型の十字形ストゥーパが発見され、多くの特徴的な塑像が出土しているものの、寺院全体の配置などは不明である（Stein 1907）。同じくホータンのダندان・ウィリクでは、散在する単室あるいは回字形の祠堂に仏像が祀られており、その近傍にはストゥーパが存在しないという特徴がある（Stein 1907）。一方で西域北道では、トゥムシュクのトックズ・サライやクチャのドゥルドゥル・アクルなどで、方形基壇を持つストゥーパと祠堂列や方形僧房風の建造物群が寺院を形成しており、ガンダーラの仏教寺院と共通する要素が認められる。同じ北道沿いに所在するカラシャールのミンオイでは、非常に多くの単室・回字形の祠堂が列をなして形成され（図 8）、ストゥーパ風の外見でも内部が空洞になった建造物（スタインは、葬送に関する建物としている。Stein 1921, Vol. 3）が存在するなど、まったく異なる様相を示す。これらの祠堂の多くに仏像が安置されていたが、ストゥーパ基壇の可能性のある遺構が存在していた例も少数存在している。さらにクチャ周辺の石窟寺院の多様な平面プランも考慮すると、この時期の西域の様相は複

雑で、共通する特徴を抽出することは困難に思える。

とはいえ、ストゥーパの存在という点に焦点を当てるなら、西域ではその重要性が次第に低下していく、という傾向は認められるかもしれない。トハーリスターンにおいても、一部の仏教寺院でストゥーパの重要性が低下している例があったが、北道のミンオイのように、祠堂ばかりに極端に偏った構成は存在していない。

4. チュー川流域

(1) チュー川流域への仏教伝播

ストゥーパの重要性の相対的な低下を考えるうえで、非常に興味深いのがチュー川流域（現在のキルギス共和国北部。図1を参照）に所在する仏教寺院址である。5世紀以降にソグド人によっていくつかの都市が建造されると、さまざまな宗教とともに仏教も信仰されるようになった。この地を通過した玄奘が仏教の存在に言及しないことを考えると、その伝播は7世紀第2四半期以降とするのが妥当であろうか。伝播のルートも特定することは難しいが、トハーリスターンおよび中国西域の双方から影響を受けているものと考えられる。

(2) 多数の回字形祠堂と唯一のストゥーパ

発掘調査された仏教寺院として、アク・ベシム遺跡の3つの仏教寺院址と、クラスナヤ・レーチカ遺跡の3つの仏教寺院址が知られる。この中で、ストゥーパが存在しているのはクラスナヤ・レーチカ遺跡の第3仏教寺院址だけで、最大長が50 m前後の大型ストゥーパ（図9）が壁で囲まれており、その周囲に祠堂などが並んでいた。そのうちのひとつは回字形で、内陣からは膝張りで1.5 mを超える粘土製の仏坐像が出土した（Torgoev et al. 2019）。

これ以外の寺院のうち、アク・ベシム遺跡の第1・第2仏教寺院址と、クラスナヤ・レーチカ遺跡の第1・第2仏教寺院址は、その中心建物が回字形祠堂で、周囲にストゥーパが認められない（図10）。この点では中国西域の影響が強いように思われる。

(3) 中央アジアの大雲寺

そもそもアク・ベシム遺跡は、7世紀後半に唐の西方軍事拠点である安西四鎮のひとつ、「碎葉鎮城」が設置されたことで知られており、近年の帝京大学による発掘調査で大量の中国式の瓦や漢字碑文断片などが出土したことで、その実態が明らかになりつつある。その中にある第0仏教寺院址と呼ばれる遺構（図11）でも、2024年から始まった龍谷大学・帝京大学の共同調査によって、中国式の瓦や中央アジア地域の伝統とはまったく異なる版築技法で建造した基壇などが出土した。この遺構が、武則天が唐（周）の各州に建立することを命じた「大雲寺」であった可能性が極めて高い（山内 2025）。2026年春の調査で、基壇に取り付く埴積みの階段（図12）が出土したことも特筆に値する。

つまりチュー川流域では、トハーリスターンや中国西域からの影響を受けたガンダーラ以来の伝統的な仏教と、中国本土で実践されていた仏教が共存していたことになる。さらにこの推定大雲寺の伽藍配置は、1966 年の航空写真の分析からは双塔伽藍となる可能性がある。その場合、7～8 世紀の中国の楼阁式仏塔が中央アジアに登場していたことになり、当時の多様な仏教の在り方を象徴する事例となるだろう。

おわりに

広域ガンダーラにおいて、方形基壇と高い円胴部を備えたストゥーパを中心とし、大量の仏像を安置する祠堂や奉献小塔、方形僧坊を伴う仏教寺院が1～2世紀頃から新たなスタンダードとなった。ガンダーラの仏教が当時の交易路沿いに伝わると、そのスタンダードに伝統的な宗教建築を取り入れた独自の仏教寺院が各地で誕生したと考えられる。ストゥーパの持つ意味も、その地域・時代によって徐々に変容していったに違いない。一方で時代が降れば、中国西域、さらには中国本土の仏教が中央アジアの仏教に影響を与える「仏教西漸」も確実に存在している。その影響関係は複雑で、今後のさらなる研究が必要である。

【参考文献】

- 岩井俊平 2006 「アフガニスタンおよび周辺地域の仏教寺院の変遷」 『佛教藝術』 289、pp. 100-112。
- 岩井俊平 2019 「中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷」 『帝京大学文化財研究所研究報告』 第 18 集、pp. 422-403。
- 加藤九祚 1997 『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』 シルクロード学研究センター
- 桑山正進 1990 『カーピシー・ガンダーラ史研究』 京都大学人文科学研究所
- 桑山正進 1998 「アウグストゥス霊廟と大ストゥーパー車輪状構造の由来—」 『東方學報』 京都第 70 冊、pp. 566-506。
- グレゴリー・ショペン（桂紹隆訳）2007 「仏教文献学から仏教考古学へ—インド仏教における聖者の傍らへの埋葬とブッダの現存性」 『大乘仏教のアジア』 シリーズ大乘仏教 10、春秋社、pp. 3-43。
- 中日／日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編（1999） 『中日／日中共同 尼雅遺跡学術調査報告書』 第 2 巻
- 向井佑介 2020 『中国初期仏塔の研究』 臨川書店
- 向井佑介 2026 『仏塔伝来—東アジアにひろがる古代寺院（歴史文化ライブラリー633）』 吉川弘文館
- 山内和也 2025 「碎葉鎮城の大雲寺の位置と伽藍配置に関する試論」 『帝京大学文化財研究所研究報告』 第 23 集、pp. 167-189。
- 立正大学ウズベキスタン学術調査隊編 2020 『カラ・テペ テルメズの仏教遺跡』 六へ書房
- Behrendt, K. 2004. *The Buddhist Architecture of Gandhara*. Leiden-Boston: Brill.

Brown, P. 1959. *Indian Architecture (Vol.1) Hindu and Buddhist Periods*. 4th ed. Bombay: D. B. Taraporevala Sons and Co. Private LTD.

Fussman, G. 2011. *Monuments Bouddhiques de Termez I*. Paris: Diffusion de Boccard.

Литвинский, Б. А. и Зеймаль, Т. И. 1971. *Аджина-Тепа: Архитектура, Живопись, Скульптура*. Москва: Издательство «Искусство».

Litvinskij, B. A. and Zejmal', T. I. 2004. *The Buddhist Monastery of Ajina Tepa, Tajikistan: History and Art of Buddhism in Central Asia*. Rome: IsIAO.

Marshall, J. 1951. *Taxila*. 3 Vols, Cambridge: Cambridge University Press.

Rhie, M. M. 1999. *Early Buddhist Art of China and Central Asia*, vol. 1. Leiden-Boston-Köln: Brill.

Rhie, M. M. 2002. *Early Buddhist Art of China and Central Asia*, vol. 2. Leiden-Boston-Köln: Brill.

Shenkar, M. 2011. Temple Architecture in the Iranian World in the Hellenistic Period. In: Kouremenos, A., Chandrasekaran, S. and Rossi, R. (eds.) *From Pella to Gandhara: Hybridisation and Identity in the Art and Architecture of the Hellenistic East*. Oxford: Hadrian Books.

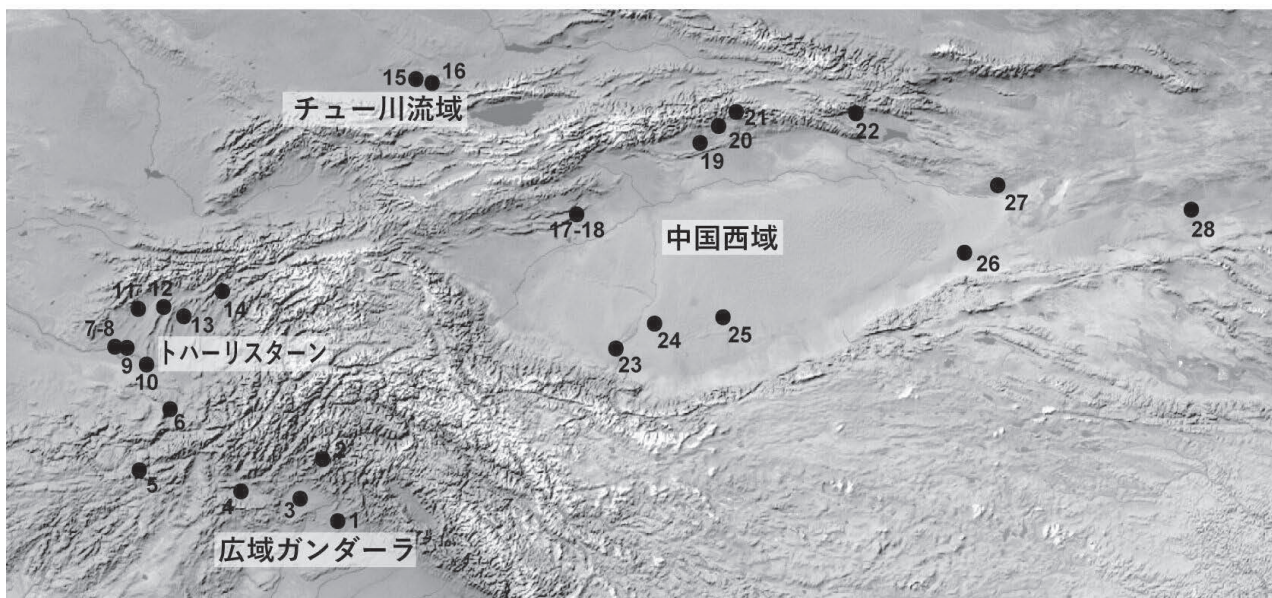
Stein, M. A. (1907) *Ancient Khotan: detailed report of archaeological explorations in Chinese Turkestan*. 2vols, Oxford: The Clarendon Press.

Stein, M. A. (1921) *Serindia: detailed report of explorations in Central Asia and westernmost China*. 5 vols, Oxford: The Clarendon Press.

Torgoev, A., Kulish, A., Kiy, E. and Kolchenko, V. 2019. The Buddhist Monastery of Krasnaya Rechka Settlement: The main findings 2010-2015. In: Baumer, C. and Novak, M. (eds.) *Urban Cultures of Central Asia from the Bronze Age to the Karakhanids*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 349-363.

Зяблин, Л. (1961) Второй Буддийский Храм Ак-Бешимского Городища. Фрунзе: Издательство Академии Наук Киргизской ССР.

※本稿は、JSPS 科研費 JP23K25399, JP 21H04984 の助成を受けたものです。



- | | | | |
|--------------|----------------|----------------|-----------------|
| 1. タキシラ | 2. ブトカラ I | 3. タフティ・バーイ | 4. ハッダ |
| 5. バーミヤーン | 6. スルフ・コートル | 7. ファヤズ・テパ | 8. カラ・テパ |
| 9. アイルタム | 10. ウシュトゥル・ムッロ | 11. ダルヴェルジン・テパ | 12. カライ・カフィルニガン |
| 13. アジナ・テパ | 14. ヒシュト・テパ | 15. クラスナヤ・レーチカ | 16. アク・ベシム |
| 17. トックズ・サライ | 18. トウムシュク・ターグ | 19. キジル石窟 | 20. ドゥルドウル・アクル |
| 21. スバシ | 22. ミンオイ | 23. ラワク | 24. ダンダン・ウィリク |
| 25. ニヤ | 26. ミーラン | 27. ローラン | 28. 敦煌莫高窟 |

図 1 関連地域地図

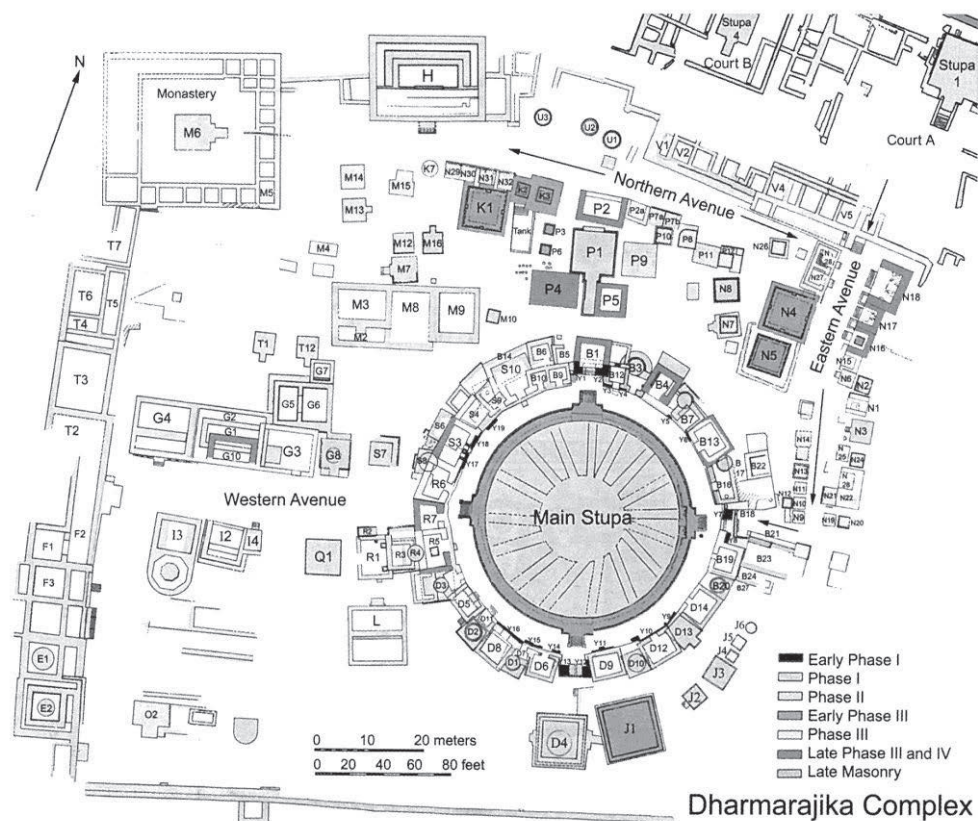


図 2 ダルマラージカー平面図 (Behrendt 2004, Fig. 1)

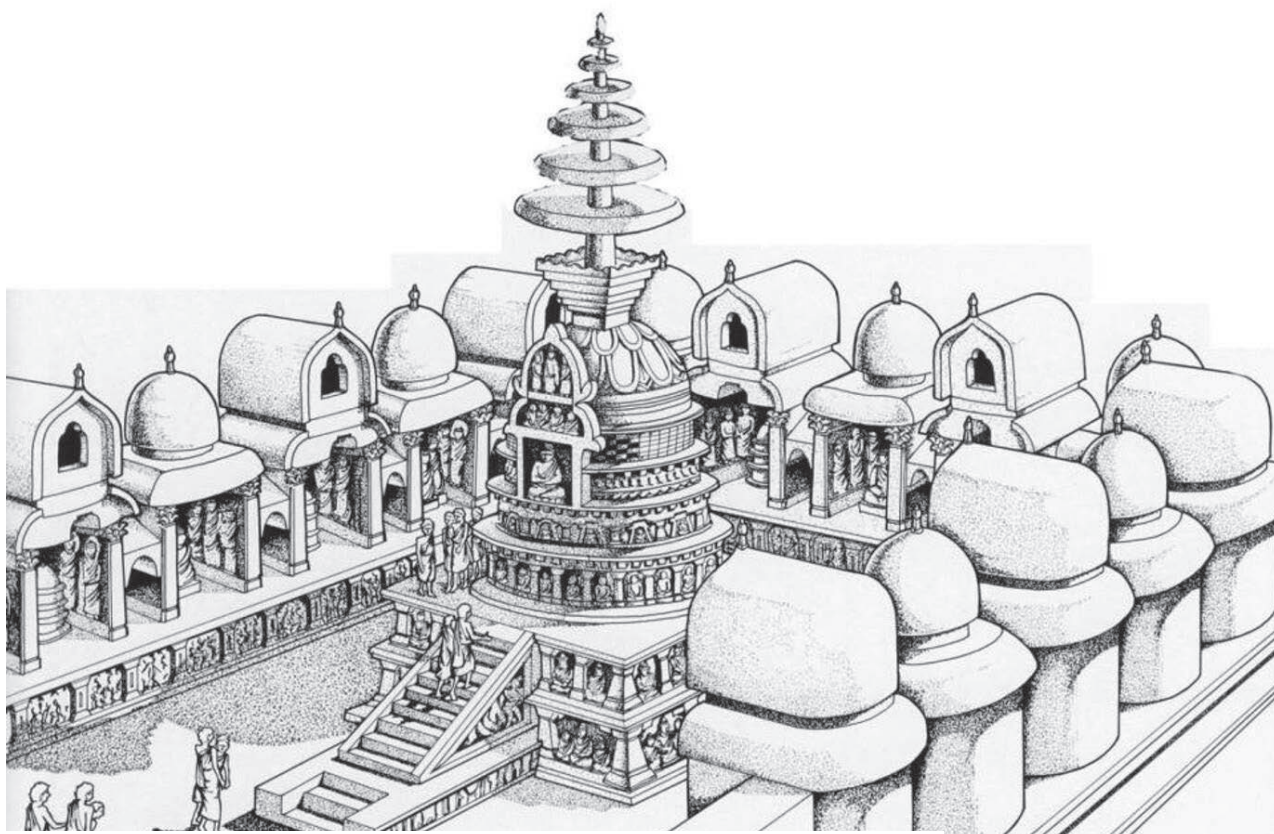


図3 ガンダーラ仏教寺院の想像図 (Brown 1959, Pl. XXXⅢ)

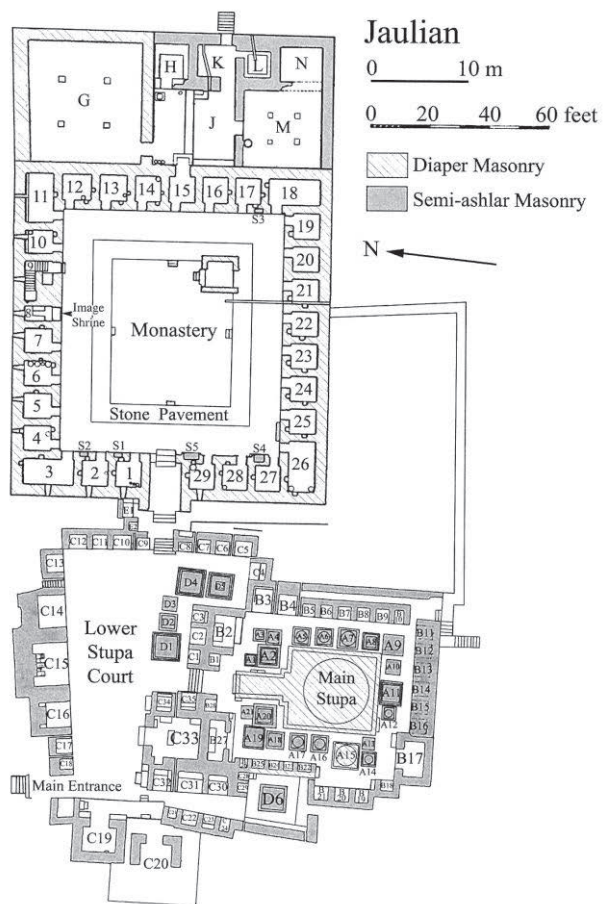


図4 ジャウリアーン平面図
(Behrendt 2004, Fig. 27)

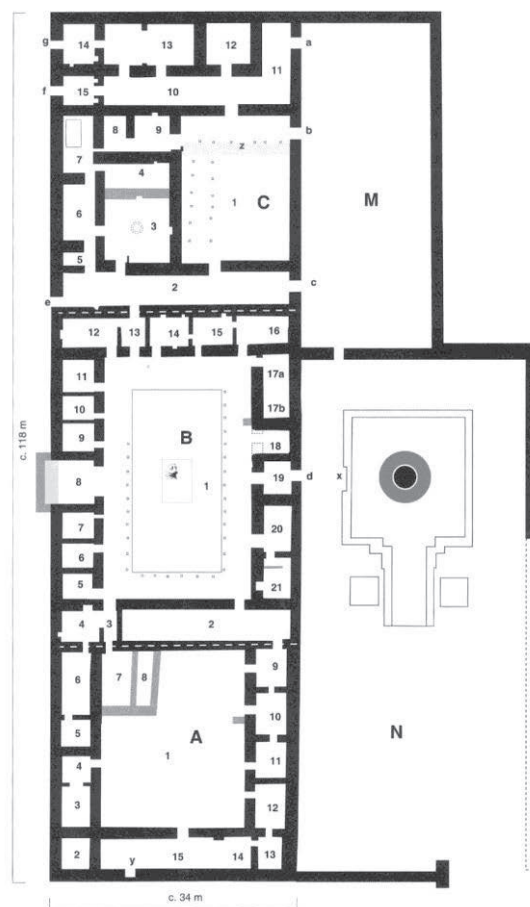


図5 ファヤズ・テパ平面図
(Fussman 2011, Planche 21 を一部改変)

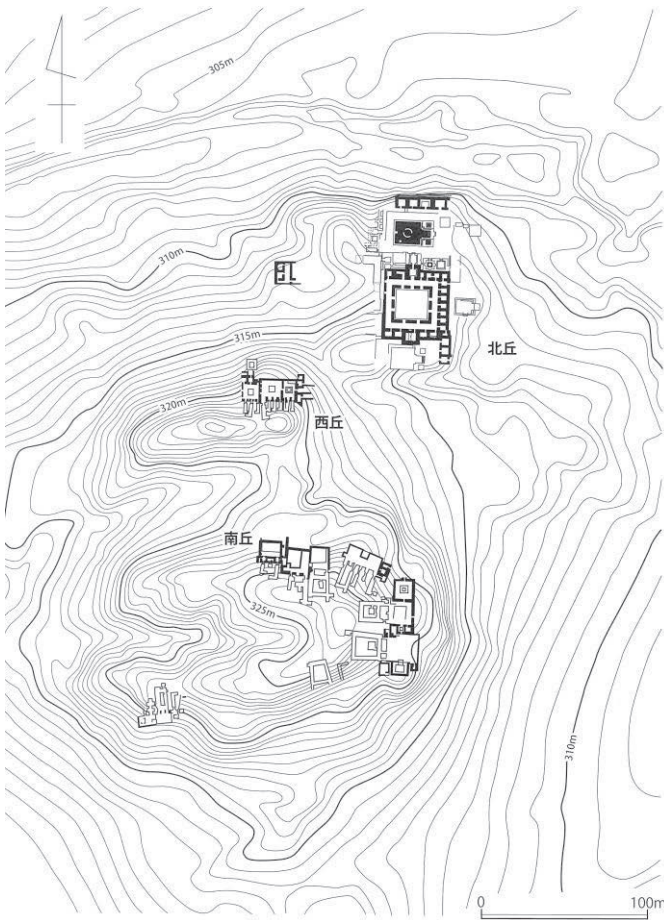


図6 カラ・テパ全体図
(立正大学編2020, Fig. 24)

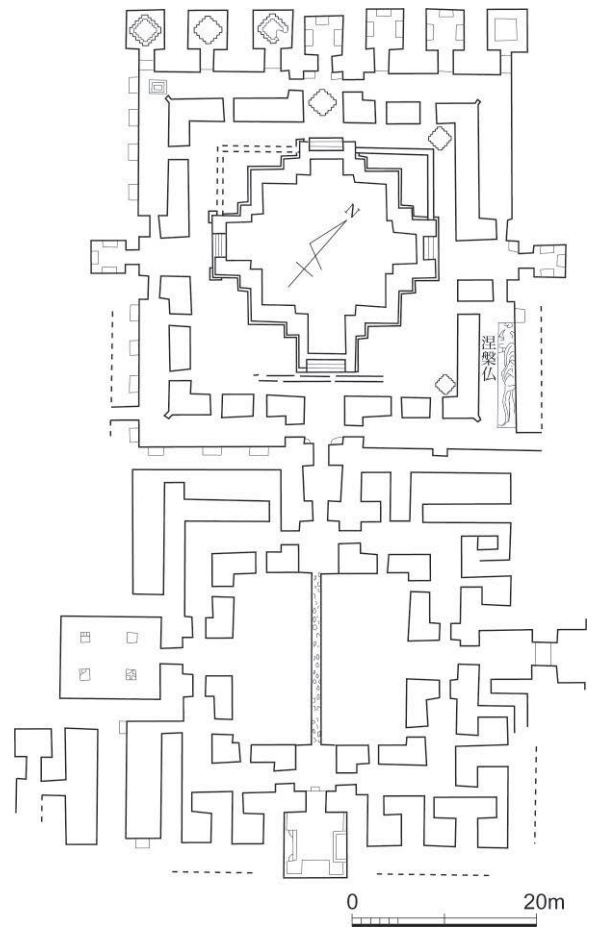


図7 アジナ・テパ平面図
(Litvinskij and Zejmal' 2004, Fig. 3
を一部改変)



図8 ミンオイ遺跡の遺構分布図 (Rhie 2002, Fig. 5.1c を一部改変)



図9 クラスナヤ・レーチカ
第3仏教寺院址のストウーパ

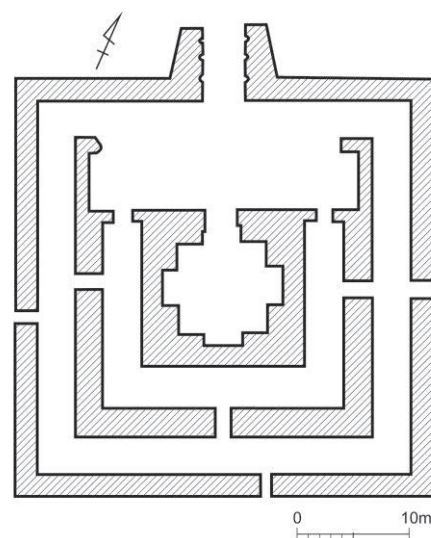


図10 アク・ベシム第2仏教寺院址平面図
(Зяблин 1961, рис. 1 を再トレース)

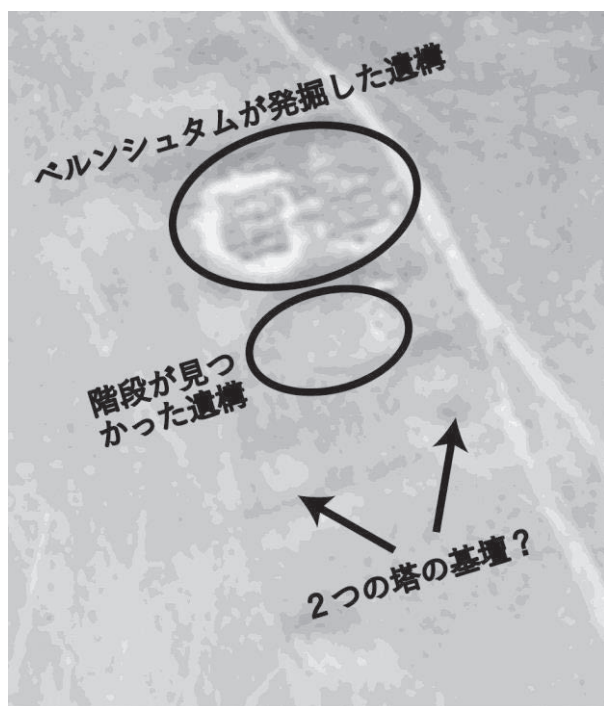


図11 アク・ベシム遺跡第0仏教寺院址の
1966年の航空写真



図12 第0仏教寺院址で出土した磚積み階段

諫早 直人 (いさはや なおと)

京都府立大学文学部准教授 / 東北アジア考古学

Keyword：初期仏教・仏舎利埋納・舍利荘嚴具・百済

[略歴]

東京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。

博士（文学）。

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所研究員などを経て、
2018 年より京都府立大学文学部准教授。



[主な論著]

- ・『海を渡った騎馬文化 馬具からみた古代東北アジア』風響社、2010 年
- ・『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣、2012 年
- ・『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』編著 六一書房、2023 年
- ・『馬・車馬・騎馬の考古学』共編著 臨川書店、2026 年
- ・『東方ユーラシア馬文化の研究』共編著 臨川書店、2026 年
- ・諫早直人編『日本列島初期仏教受容史の再構築』京都府立大学文学部歴史学科、2026 年

「朝鮮半島から日本列島へ—飛鳥寺成立の前後—」

1. はじめに

百済から倭へ仏教が公伝した時期をめぐっては、538 年や 552 年など諸説ある。崇仏派と排仏派の対立など、仏教公伝後の経過も『日本書紀』につぶさに記されているが、その評価はまだ定まっていない。いずれにせよ如上の仏教公伝から受容に至る歩みはすべて、なお日本列島各地で盛んに前方後円墳の築造された古墳時代後期、6 世紀代の出来事である。後世に編纂された文献史料や、仏像などの寺院の所蔵する伝世資料ではなく、同時代資料にもとづいて日本列島における仏教の受容を議論する上で、考古学にかかる期待は大きい。その痕跡を古墳時代後期の考古資料の中に見出すことは容易でない。その点において、今から半世紀以上前におこなわれた飛鳥寺の発掘調査成果は、重要な意味をもち続けている。

飛鳥寺は法興寺、本元興寺とも呼ばれる日本最初の本格的な伽藍をもつ仏教寺院である。『日本書紀』などの記すところによれば、587 年に物部守屋を討滅する際に蘇我馬子が発願し、592 年から寺院の造営が本格的に始まり、7 世紀初頭には伽藍の中心部分が完成したとされる。鎌倉時代の雷火によって創建時の伽藍はすべて焼失してしまった

が、奈良国立文化財研究所（現、奈良文化財研究所）による 1956 年から 1957 年の足かけ 3 次に及ぶ飛鳥寺跡の発掘調査で、木塔を中心とする一塔三金堂式という、国内ではいまだに類例のない、特異な伽藍配置が明らかとなり、木塔心礎上面からは様々な器物が、一部、創建当初の埋納位置を保った状態で出土した（奈良国立文化財研究所 1958）。『日本書紀』推古天皇元年（593）条の「元年の春正月の壬寅の朔丙辰に、仏の舍利を以て法興寺の刹の柱の礎の中に置く。丁巳に、刹の柱を建つ」と対応する日本最古の舍利埋納儀式の現場である。

これまでのところ、飛鳥寺造営以前に遡って仏教が信仰されていたことを知る、確かな考古資料はみつかっていない。したがって、朝鮮半島から日本列島への仏教の伝播を考古資料からトレースするためには、飛鳥寺を基準点に据え、その評価を定めた上で、飛鳥寺造営に至る前史を古墳時代資料の中に見いだす必要がある。そのような目的意識のもと、発表者は 2014 年から奈良文化財研究所の石橋茂登氏らと共同で、飛鳥寺塔心礎埋納品の再整理作業を進めてきた。本発表ではその成果の一部を改めて紹介した上で、朝鮮半島の考古学的状況をふまえつつ、日本列島における初期の仏教受容のあり方について私見を述べたい。

2. 飛鳥寺木塔跡の発掘と塔心礎埋納品の発見

（1）飛鳥寺木塔跡の発掘（図 1）

本題に入る前に、二度にわたって実施された飛鳥寺木塔跡の発掘調査を簡単に振り返っておこう。まず第一次調査（1956 年）では、礎石は残っていなかったが、基壇外装や階段の痕跡から一辺 12m の方形基壇であることが明らかとなった。それを受けて実施された第三次調査（1957 年）では、塔基壇内部の調査がおこなわれ、基壇中央の深さ 60cm のところから花崗岩製の石櫃が出土した。石櫃は上下二つの石からなっており、上石をとりはずすと下石のなかには四角い木箱があり、木箱とその周りから大量の遺物が出土した。また、木箱の中には、創建当初の舍利荘厳具の一部とみられるトンボ玉や琥珀片などとともに、新造されたとみられる金銅製の舍利内容器が納められていた。

木箱には、建久 7 年（1196）6 月 17 日に飛鳥寺が落雷により焼失したことや、村役人や六人の僧の名前が墨書されていた。その内容は当時、東大寺の権大僧都であった弁曉が建久 8 年（1197）4 月 20 日付けで書いた注進状の草案である『本元興寺塔下掘出御舍利縁起』の「建久八年三月廿四戊戌、大和国本元興寺の塔心柱下より掘り出し奉るところの御舍利其数百余粒ならびに金銀器物等本縁の事」と対応する。さらには注進状には書かれなかったその後の顛末、すなわち掘り出した舍利の一部を、新造の舍利容器に入れ、舍利荘厳具の一部とともに木塔跡に再埋納していたことまでもが、木箱の墨書から明らかとなったのである。

建久 8 年 3 月に掘削された南北 3m、東西 8m 以上の大きな長方形の発掘坑の底、深さ

2.7m のところからは、一辺 2.4～2.6m ほどの心礎も検出された。心礎中央に設けられた一辺 30cm、深さ 21cm の方形舍利孔の中身はすべてもちだされていて、その際のものと思われる燈明皿以外に何も出土しなかった。しかしながら、鎌倉時代に発掘の及ばなかった心礎の東隅から札甲（挂甲）が、西南隅から馬具や砥石状石製品などが創建当初の埋納状態を保ったまま出土したほか、鎌倉時代の発掘坑埋土からも創建当初の舍利荘嚴具とみられる大量の遺物が出土した。この一連の発掘で出土した遺物が「飛鳥寺塔心礎埋納品」である。

（２）飛鳥寺塔心礎埋納品の出土状況

飛鳥寺木塔跡の発掘調査では実に様々な遺物が出土しているが、その中には出土位置から本来の埋納時期や埋納位置を特定できるものと、攪乱層（鎌倉時代の発掘坑埋土）から出土し、特定できないものが混在している。本来の埋納時期については、推古天皇元年（593）に塔を建てる際に心礎舍利孔および心礎上面に埋納されたとみられるもの（Ⅰ：推古天皇元年埋納品）と、建久 8 年（1197）3 月 24 日以降に焼けた塔跡に新たに埋納されたとみられるもの（Ⅱ：鎌倉時代の埋納品）に大別することが可能である（図 2、表 1）（諫早 2017 など）。

前者は出土状況から、以下の四つにさらに細分することが可能である。まずは心礎上面から埋納時の位置を保って出土したもので（Ⅰ-①）、札甲や馬具、砥石状石製品、耳環、刀子、金銅製打出金具、ガラス小玉などがある。創建当時の舍利埋納儀式を復元する上で、基準となる資料である。次は、心礎上面、鎌倉時代の発掘坑の最下面から出土した、耳環、刀子、雲母片、金・銀の延板・小粒などである（Ⅰ-②）。その次は、鎌倉時代の発掘坑の埋土の中から出土した、耳環、刀子、各種玉類、金・銀の延板・小粒、歩揺などである（Ⅰ-③）。そして最後が、鎌倉時代に舍利が再埋納された際に一緒に石櫃の中に納められたもので（Ⅰ-④）、各種玉類や金銅製の打出金具、歩揺、金銅鈴、琥珀片などが該当する。

鎌倉時代に発掘の及ばなかったⅠ-①以外は、原位置を保っておらず、鎌倉時代の遺物が混ざっている可能性も考えられたが、一連の整理作業を通じて、鎌倉時代の埋納にあたって新たに埋納されたと考えられる遺物は舍利容器や燈明皿以外になく、石櫃内の舍利荘嚴具も創建当初の埋納品の再埋納であることが明らかとなった（田村 2016、諫早 2025 など）。

なお、Ⅰのタイミングについては、冒頭で紹介した「元年の春正月の壬寅の朔丙辰に、仏の舍利を以て法興寺の刹の柱の礎の中に置く。丁巳に、刹の柱を建つ」という『日本書紀』の記録から、舍利が埋納された正月 15 日（A）と、翌日 16 日の心柱の立柱後（B）という少なくとも二つの可能性があり、出土位置から B の可能性が高いⅠ-①については、舍利荘嚴具ではなく、地鎮具とする意見もある（岡本 2010 など）。ただし、舍利孔に到底おさまらないサイズの砥石状石製品や札甲などはさておき、Ⅰ-①に含

まれる耳環や刀子、ガラス小玉といった小型品の多くが、舍利孔に納められていた可能性もある I-②～④にも含まれていることからみても、Aに伴う遺物とBに伴う遺物を厳密に区別することは困難である。

3. 飛鳥寺塔心礎埋納品の概要と埋納状況の復元

(1) 飛鳥寺塔心礎埋納品の概要

ここからは飛鳥寺塔心礎埋納品の概要を出土位置ごとに紹介する。

①心柱周囲に埋納された、ないし埋納された可能性の高い遺物

I-①、およびそれと同じ器種が該当する。出土位置からみて心柱の立柱後に心礎上面に埋納されたと考えられる一群である。刀子や耳環の多くは同時期の古墳副葬品にみられるもので、加耶に系譜をもつ馬具もまた、前後する時期の古墳副葬品に類例が散見される（諫早 2015 など）。耳環などに一部舶載品が含まれている可能性はあるが、多くは倭製品である。これらに対し札甲はこれまでも朝鮮半島からの舶載品と目されてきたが、近年、悉皆的な資料化と百済の公州公山城出土例との比較がおこなわれた結果、百済からもたらされた舶載品の可能性が高まっている（初村 2026）。

②心礎舍利孔に埋納された可能性のある遺物

I-②～④のうち、I-①にはみられない器種が該当する。石櫃内に大量に埋納されていた各種玉類や歩揺などの金銅製品片・銅製品片の多くは、本来、方形舍利孔に納められていたがゆえに、微小な遺物も回収され新造の舍利容器と一緒に石櫃内に再埋納された可能性がある。ガラス小玉は悉皆的な材質分析の結果、すべて創建時のものとみられ（田村 2016）、一部のガラス小玉（Group SIII C）については大賀克彦氏によって「百済から送られてきた仏舎利に伴う荘厳具であった可能性」が指摘されている（石橋ほか 2026）。また、同時期の古墳副葬品にみられない真珠玉の存在も明らかとなっている（田村 2017）。『本元興寺塔下掘出御舍利縁起』に記載のある金製・銀製の舍利容器は鎌倉時代に持ち出され、再埋納されることはなかったようだが、銅製容器の破片があり、三田覚之氏によって碗形の舍利外容器（復元径 6 cm）が復元されている（石橋ほか 2025）。鎌倉時代の発掘坑の最下面から出土した、金・銀の延板、小粒については、同時期の古墳副葬品には類例がなく、舍利とともに百済からもたらされた舶載品の可能性が高い（諫早ほか 2018）。

③心礎舍利孔を構成する遺物

方形舍利孔の石蓋とみられる竜山石製の蓋状石製品の破片があり、家形石棺に類似する形状に復元する案が廣瀬覚氏によって提示されている（廣瀬ほか 2026）。蛍光 X 線分析の結果、表面に水銀朱とベンガラが重ね塗りされていることが明らかとなった。

④鎌倉時代に新たに埋納された遺物

金銅製舍利内容器と木製舍利外容器、およびそれらと舍利荘厳具を納めた花崗岩製の

石櫃と、心礎舍利孔に納められた燈明皿がこれにあたる。金銅製舍利内容器は同時期に類例のない器形で、創建当初の舍利容器がイメージされている可能性が三田覚之氏によって指摘されている（石橋ほか 2023）。その身と蓋はぴったりと組み合っており、内容物をみることはできないが、村田泰輔氏による X 線 CT 撮像によって、舍利内容器の内部に最大長径が 1～5mm 程度の小片もしくは破片が多数存在することが確かめられている（石橋ほか 2024）。それらの多くは孔をもつ形状から明らかにガラス小玉とみられるが、1～2mm 程の鉾物片もわずかに含まれており、後者については創建当初の舍利の一部である可能性がある。

（２）飛鳥寺塔心礎埋納品の埋納状況の復元

以上を整理すると、①心柱周囲に埋納された、ないし埋納された可能性の高い遺物には、甲冑や馬具のように一辺 30cm、深さ 21cm の方形舍利孔には到底納まらない大型品に加えて、耳環や刀子のような身体着用品が複数セットある。これに対し、②心礎舍利孔に埋納された可能性が高い器物の中には、大量の玉類以外に身体着用品になりそうなものがない。また前者の多くは同時期の古墳副葬品との共通性が看守されるのに対し、後者の中には金・銀の延板、小粒や真珠玉など同時期の古墳副葬品にはみられないものが含まれている。飛鳥寺塔心礎埋納品の構成については、向井佑介氏によってインドに起源する舍利埋納本来のあり方がかなり忠実に再現されている可能性が指摘されているが（向井 2023）、飛鳥寺塔心礎において復元された個々の器物の埋納位置やタイミングの違いは、舍利埋納儀式において各種舍利荘嚴具の埋納に込められた意味が一様でなかったことを示唆する。

また飛鳥寺塔心礎埋納品については古墳祭祀の影響が強く見積もられてきたが（坪井 1985 など）、古墳副葬品との共通性が看取される耳環、刀子の出土位置や数量、材質・意匠などからみて、それらは釈迦（仏陀）の所有品を象徴するようなものではなく、参列者個々人の供献品（供養品）の可能性が高い。当時、最も一般的な副葬品であった須恵器などの埋納が認められないことに加えて（酒井 2009）、以下にみる百済寺院の舍利荘嚴具との共通性をふまえれば、古墳副葬品と舍利荘嚴具の間の共通性を、倭の独自性として過度に評価するのは危険であろう。一見、古墳祭祀からの強い影響とみなしうる、舍利孔内の全面赤彩や、家形石棺状を呈していた可能性のある舍利孔蓋石も、釈迦の遺骨である仏舍利を納める施設としての仏塔がインドから伝わる過程において、それを受容する地域で起こった変容の一形態としてまずは理解する方がよい。

4. 飛鳥寺塔心礎埋納品からみた日本列島における仏教の受容

（１）百済寺院の舍利埋納

飛鳥寺の造営が百済の全面的なバックアップによって達成されたことは、瓦の比較考古学的研究に加えて、『日本書紀』崇峻天皇元年（588）条の「是歳、百済国、使并て僧

恵総・令斤・恵等を遣して、仏の舍利を献る。」からもうかがえるところではあるが、百済の舍利埋納の実態が明らかとなったのは、比較的最近のことである。

ここからは、扶余王興寺木塔跡、益山弥勒寺西石塔から相次いで出土した舍利容器、舍利莊嚴具について簡単にみておきたい。まず王興寺は忠清南道扶余郡、錦江のほとりに位置する百済寺院である。扶余は当時、泗沘と呼ばれ、538年から百済が滅亡する660年まで王宮の置かれたところで、王城である扶蘇山城は錦江を挟んで指呼の関係にある。国立扶余文化財研究所（現、国立扶余文化遺産研究所）によって継続的に発掘調査がおこなわれた結果、塔、金堂、講堂が南北に一直線に並ぶ、日本の四天王寺式とよく似た伽藍配置が明らかとなったほか、2007年の木塔跡の調査では飛鳥寺と同規模、一辺約12mの木塔基壇の中央地下に据えられた‘舍利装置石’から、舍利容器やおびただし数の舍利莊嚴具が埋納時の状態を保って出土した（国立扶余文化財研究所2009）。

舍利容器は、銅製函（高さ10.3cm）の中に銀製壺（高さ6.8cm）を入れ、さらに金製瓶（高さ4.6cm）を入れる三重構造で、舍利は出土しなかったが、銅製函の表面に線刻された「丁酉年二月十五日百済王昌為亡王子立刹本舍利二枚葬時神化為三」から、577年に威徳王（在位554-598年）が自分より早く亡くなった王子のためにこの塔を建てたことがわかる。‘舍利装置石’に設けられた長さ16cm、幅12cm、深さ16cmの長方形舍利孔の中には舍利容器のみが納められており、約8000点におよぶ舍利莊嚴具は、すべて舍利孔の中ではなく、‘舍利装置石’の上面およびその周辺から出土した（図3・4）。舍利莊嚴具には飛鳥寺同様、前後する時期の百済古墳副葬品との共通性が指摘されている（山本2010など）。

次に弥勒寺は全羅北道益山市に所在する百済最大の寺院である。国立扶余文化財研究所を中心とする継続的な発掘調査の結果、回廊によって区画された中院と東院、西院それぞれに塔と金堂が一直線に並ぶ三院式という、東アジアでも例のない伽藍配置が明らかとなった。唯一、創建以来建ったままの状態を保っていた西石塔は一辺12.5m、残存高14.2mで、六層目までが遺存しているが、本来は九重塔であったと考えられている。2009年、国立文化財研究所（現、国立文化遺産研究所）による全面解体修理の際に心柱石第一段上面中央に設けられた一辺25cm、深さ26cmの方形舍利孔の中から、舍利容器とともに1万点近い舍利莊嚴具が出土した（国立文化財研究所2014）。それらには王興寺舍利莊嚴具と同様、前後する時期の百済古墳副葬品と共通するものが多数含まれている。また「舍利奉迎記」と呼ばれる文字が線刻された金板が出土し、その記載から弥勒寺の西石塔は武王（在位600-641年）の王妃であった佐平沙毛積徳の娘によって己亥年（639）に建てられたことも判明した。

舍利容器は三重構造で、王興寺が銅製函、銀製壺、金製瓶の順であったのに対し、弥勒寺は金銅製外壺（高さ13cm）の中に金製内壺（高さ5.9cm）を入れ、さらにガラス製瓶（頸部最小径0.4cm）を入れていた。ガラス製瓶は内壺の中で割れ、内容物は確定で

きないが、これに本来入っていた可能性のある小さな鉱物が 1 点出土しており、舍利の可能性が高い。

（２）飛鳥寺塔心礎埋納品からみた日本列島における仏教の受容

百済の地において 21 世紀の初めに相次いで見つかった両例が、日本列島で執りおこなわれた初期の舍利埋納儀式の現場である飛鳥寺塔心礎を考える上で、直接参照すべき事例であることは改めて言うまでもない。とりわけ 577 年におこなわれた王興寺の舍利埋納儀式が、飛鳥寺のそれに強い影響を与えたであろうことは、多くの研究者によって指摘されてきた通りである（鈴木 2010 など）。飛鳥寺と王興寺・弥勒寺の共通点と相違点については、以前に以下のように整理したことがある（諫早 2017）。

まずは遺構の共通点である。王興寺と飛鳥寺はどちらも塔基壇中央地下に舍利孔をもつ大きな石を設置し、舍利孔の上に石の蓋を被せる点で共通する。飛鳥・白鳳寺院の塔心礎には地下式であれ、地上式であれ舍利孔を設けるものが一定数存在するが、このような舍利埋納方式は百済と、その影響を受けた新羅にはあるものの、高句麗や中国ではまだ確認されたことがなく、飛鳥寺に先行して百済で創出された可能性が高い（佐川 2010 など）。次に遺物の共通点である。飛鳥寺にみられた金・銀の小粒や延板のようなインゴット（素材）については、同じようなものを王興寺や弥勒寺にも見出すことができる。各種玉類や耳環、刀子といった身体着装品を大量埋納する点も共通する。もちろんそれらの多くは、向井氏の指摘するようにインド以来の舍利埋納に共通する道具立てであり、基本的には百済から倭へ一方的に影響を与えたものだが、ここで注目したいのは倭・百済間にみられる双方向性である。三者の舍利荘厳具に共通して含まれるヒスイ製の勾玉は朝鮮半島には産出しない石材であり、製作から埋納に至る経緯はさておき、原石は新潟県糸魚川周辺で採取されたとみられる。中国から伝わった百済の舍利埋納儀式において、倭からもたらされた器物が長期にわたって用いられ続けていた可能性がある。

最後に相違点である。先に共通点として刀子の大量埋納を挙げたが、それらの素材に注目するとまた別の面もみえてくる。というのも、飛鳥寺の刀子の中には、革袋製の鞘や鹿角装の柄をもつものがあるが、これらは王興寺や弥勒寺はもちろん百済古墳にもみられないもので、日本列島の古墳から出土する一般的な刀子の特徴である。大河内隆之氏によるマイクロフォーカス X 線 CT 調査によって、木製の柄には「ヒノキと思われる針葉樹材」が用いられていることが確かめられており（石橋ほか 2016）、もしヒノキであれば朝鮮半島には自生しない。舎利の埋納にあたって参列者が身に着けていた刀子を喜捨すること自体は百済からの影響とみてよいが、飛鳥寺の刀子の多くは日本列島で製作されたもので、紙幅の関係で詳述は避けるが、耳環についても同じようなことを指摘することが可能である。

残念ながら『日本書紀』には、飛鳥寺の舍利埋納儀式が具体的にどのようにおこなわ

れたのかについての記載はない。平安時代後半に編纂された『扶桑略紀』には「刹柱を立つる日、嶋大臣（蘇我馬子）ならびに百余人みな百済の服を着す。観る者ことごとく悦ぶ」という記載があり、何らかの史実を反映している可能性はあるが、少なくとも王興寺や弥勒寺の舍利荘厳具にみられるような冠帽や鍔帯といった百済の身体着装品は、飛鳥寺塔心礎埋納品にはない。また、これまで古墳副葬品との共通性ばかりが強調されてきた札甲や馬具についても、特定個人やその人が乗ったであろう馬を飾った点において、耳環や刀子のような身体着装品と同じ性格を読み取ることが可能である。飛鳥寺塔心礎埋納品の独自性の多くが、古墳副葬品と共通する部分に認められることは事実だが、舍利荘厳具と古墳副葬品の共通性は百済でも認められる。それらの多くが身体に装着する器物であることをふまえば、飛鳥寺と王興寺・弥勒寺の舍利荘厳具の違いには、それぞれの舍利埋納儀式に参列した人々の「装い」の違いが強く反映されているとみてよい（諫早 2017）。

5. おわりに

近年の百済における相次ぐ舍利荘厳具の発見は、創建当初の出土状況を部分的にしか知りえない飛鳥寺塔心礎埋納品の限界を克服し、朝鮮半島から日本列島への仏教の伝播を具体的なモノから語る端緒を提供している。たとえば 577 年におこなわれた王興寺の舍利埋納儀式では、舍利孔には舍利容器だけを入れ、舍利荘厳具は舍利孔の外に置かれていたが、王興寺に遅れることおよそ 60 年、639 年におこなわれた弥勒寺西石塔の舍利埋納儀式では、舍利容器と舍利荘厳具をすべて舍利孔の中に納められていた。弥勒寺と同じような状況は 7 世紀後半の奈良県法隆寺五重塔や滋賀県崇福寺木塔跡の心礎にも認められる（図 5）。そして、王興寺と弥勒寺の間、593 年にとりおこなわれた飛鳥寺の舍利埋納儀式では、舍利孔内に舍利と一緒に納められた器物と、心柱の立柱後に心礎上面に納められた器物があったことが明らかとなりつつある。

このようにみていくと、心礎舍利孔をもつ塔における舍利と舍利荘厳具の埋納場所は、百済と日本において「分置」から「一括」へという変化がパラレルに（おそらくは百済が若干先行して）進行していることがわかる。王興寺にはみられなかった真珠玉が飛鳥寺と弥勒寺にはみられるように、舍利荘厳具それ自体の構成にも同じことを指摘できる。飛鳥寺造営を前後する頃から、百済滅亡（660 年）に至るまでの間、両国における仏教寺院の展開には単なる伝播や模倣の域に留まらない直接的かつ密接な交流が継続し、日本列島各地でみつかるとなる舍利孔をもつ塔心礎から、百済滅亡後も日本列島内でしばらくの間、その名残を留めていたようである（ただし、それらの多くは百済寺院にみられる方形舍利孔ではなく、円形舍利孔である）。分置された器物について王興寺では舍利荘厳具と呼んでいるのに対し、飛鳥寺では地鎮具の可能性も指摘されてきたが、両者の道具立ての共通性や、舍利孔をもつ心礎（王興寺は「舍利装置石」）自体が舍利の最

外容器でもあることをふまえれば、飛鳥寺で分置された器物についても舍利孔内に収められた器物と厳密に区別する理由はなく、舎利の埋納から翌日の心柱の立柱までを含めて、一連の儀式として理解するのが妥当であろう。

このような舎利容器、舎利荘嚴具や埋納方法からみえる百済と倭の舎利埋納儀式の共通性と、受容者側の「装い」の違いなどによって発露する個性は、中国、さらにはインドにまで遡る舎利埋納儀式の始源と展開を考える上でも重要な論点となるのではないだろうか。

主要参考文献

諫早直人 2015 「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要 2015』

諫早直人 2017 「飛鳥寺の発掘と塔心礎埋納品」『飛鳥・藤原京を読み解く 古代国家誕生の軌跡』クバブ
ロ

諫早直人 2025 「飛鳥寺塔心礎埋納品の考古学」『京都府立大学考古学論集』京都府立大学文学部歴史学科

諫早直人・石橋茂登・田村朋美 2018 「飛鳥寺塔心礎出土金・銀製品」『奈良文化財研究所紀要 2018』

石橋茂登・諫早直人・大河内隆之 2016 「飛鳥寺塔心礎出土刀子」『奈良文化財研究所紀要 2016』

石橋茂登・諫早直人・村田泰輔・田村朋美・星野安治・三田覚之 2023 「飛鳥寺塔跡出土舎利容器」『奈良
文化財研究所紀要 2023』

石橋茂登・諫早直人・守田悠・三田覚之・村田泰輔・田村朋美 2025 「飛鳥寺塔跡出土舎利容器の調査
(2)」『奈文研論叢』第5号 奈良文化財研究所

石橋茂登・諫早直人・横白彩江・守田悠・村田泰輔・三田覚之 2024 「飛鳥寺塔跡出土舎利容器の調査」
『奈文研論叢』第4号 奈良文化財研究所

石橋茂登・横白彩江・諫早直人・田村朋美・大賀克彦 2026 「飛鳥寺塔跡出土玉類の調査—総括編—」『日
本列島初期仏教受容史の再構築』京都府立大学文学部歴史学科

岡本敏行 2010 「日本古代における仏舎利の奉安」『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉
誠出版

酒井清治 2009 「副葬品と埴輪の問題」『季刊考古学』106 雄山閣

佐川正敏 2010 「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎設置・舎利奉安形式の系譜」『古代東アジアの仏教
と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版

鈴木靖民 2010 「王興寺から飛鳥寺へ—飛鳥文化の形成—」『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥
寺へ』勉誠出版

田村朋美 2016 『飛鳥寺跡出土遺物の研究 ガラス玉類の考古科学的研究』飛鳥資料館

田村朋美 2017 「飛鳥寺塔心礎出土の真珠製小玉」『奈良文化財研究所紀要 2017』

坪井清足 1985 『古代日本を発掘する2 飛鳥の寺と国分寺』岩波書店

奈良国立文化財研究所 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』

初村武寛 2026 「飛鳥寺塔跡出土札甲の故地に関する一試考」『日本列島初期仏教受容史の再構築』京都府

立大学文学部歴史学科

廣瀬寛・田村朋美・藤川聖起 2026「飛鳥寺塔心礎出土の砥石状石製品および舍利孔石蓋の再検討」『日本列島初期仏教受容史の再構築』京都府立大学文学部歴史学科

向井佑介 2023「仏塔と仏舎利の東伝」『アジア仏教美術論集 東アジアⅦ アジアの中の日本』中央公論美術出版

山本孝文 2010「百済古墳の副葬品と王興寺舍利荘厳具」『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版

国立文化財研究所 2014『益山弥勒寺址石塔 舍利荘厳』

国立扶余文化財研究所 2009『王興寺Ⅲ』

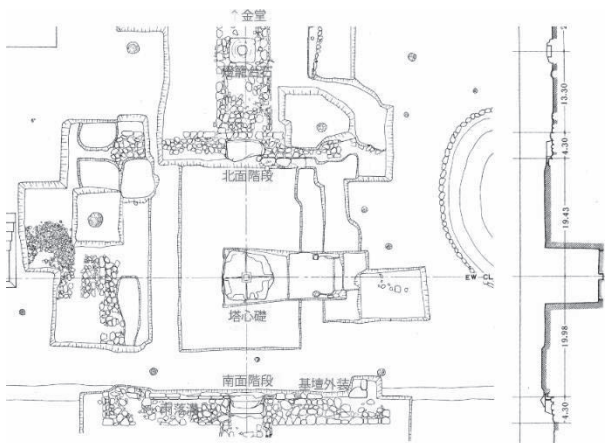


図1 飛鳥寺塔基壇平面図（奈良国立文化財研究所 1958 をもとに作成）

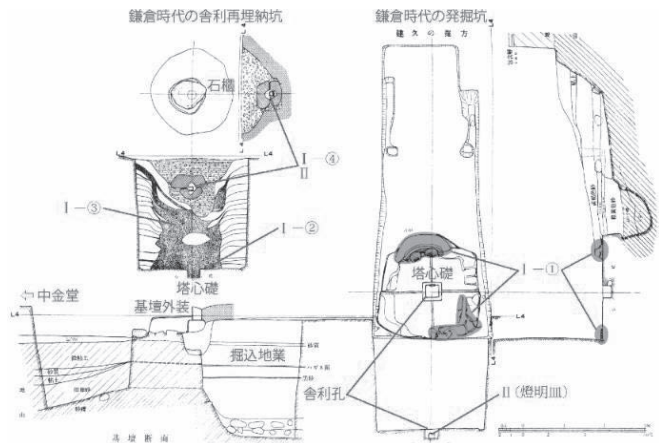


図2 飛鳥寺塔心礎埋納品の出土状況（奈良国立文化財研究所 1958 をもとに作成）

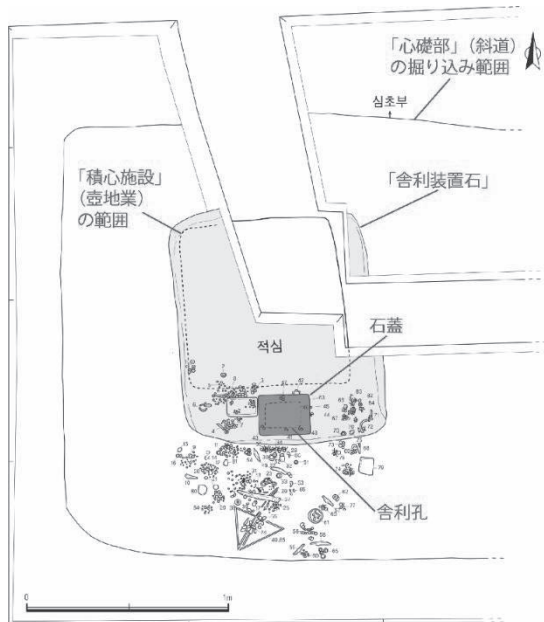


図3 王興寺塔基壇平面図（国立扶余文化財研究所 2009 をもとに作成）

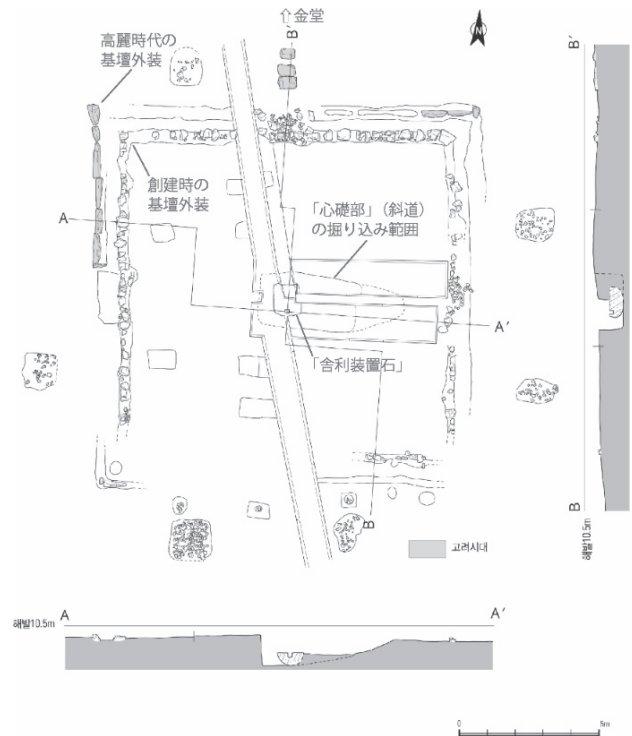


図4 王興寺舍利莊嚴具の出土状況（国立扶余文化財研究所 2009 をもとに作成）

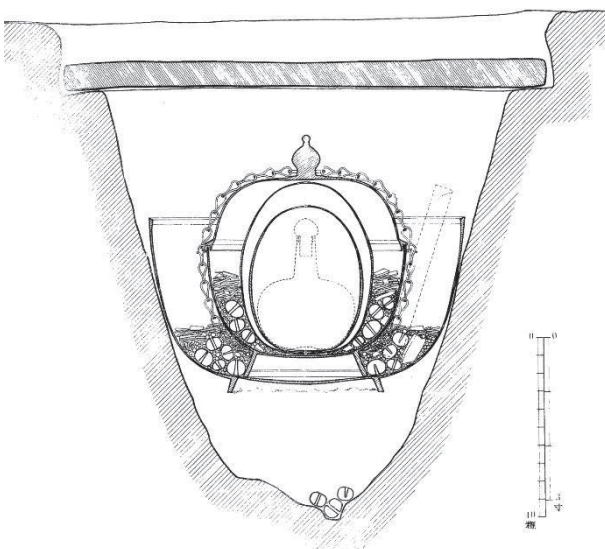


図5 法隆寺五重塔舍利莊嚴具の出土状況（法隆寺 1954 『法隆寺五重塔秘寶の調査』）

表1 飛鳥寺塔心礎埋納品一覧（2026年3月現在）

品目	材質	数量	出土状況	1958年報告	埋納位置 (復元案)	主要文献
①心柱周囲に埋納された、ないし埋納された可能性の高い遺物						
武器	札甲	鉄製	1	I-①	「挂甲」	心柱周囲 石橋・初村2025
	腕甲	鉄製	2	I-①	「肩鎧」	心柱周囲 石橋・初村2025
馬具	蛇行状鉄器	鉄製	1	I-①	「蛇行状鉄器」	心柱周囲 諫早2015
	馬鈴	青銅製	1	I-①	「馬鈴」	心柱周囲 諫早2015
刀子		鉄製	11	I-①・②・③	「刀子」	心柱周囲か 石橋ほか2016
耳環		金銅製ほか	31	I-①・②・③	「金環」	心柱周囲か 石橋ほか2017
金銅製品	鐔付半球形金具	金銅製	7	I-①	「鐔付半球形金銅金具」	心柱周囲 1958年報告
	打出文装飾円形金具	金銅製	11	I-①・④	「圓形金具」	心柱周囲か 1958年報告
	打出文装飾杏葉形金具	金銅製	25	I-①・④	「杏葉形金具」	心柱周囲か 1958年報告
	列点文装飾円形金具	金銅製	5	I-①・④	「圓形金具」	心柱周囲か —
	列点文装飾金具	金銅製	3	I-①・④		心柱周囲か —
砥石		石製	1	I-①	「砥石状の大理石」	心柱周囲 廣瀬ほか2026
②心礎舍利孔に埋納された可能性のある遺物						
金製品	金延板	金製	7	I-②・③	「金延板」	舍利孔か 諫早ほか2018
	金小粒	金製	1	I-②・③	「金小粒」	舍利孔か 諫早ほか2018
	心葉形步揺	金製	3	不明		舍利孔か —
銀製品	銀延板	銀製	5	I-②・③	「銀延板」	舍利孔か 諫早ほか2018
	銀小粒	銀製	7	I-②・③	「銀小粒」	舍利孔か 諫早ほか2018
銅製品・金銅製品	鏡形容器	銅製	4	不明		舍利孔か 石橋ほか2025
	棗形金具	銅製	7	不明		舍利孔か 石橋ほか2025
	花卉形金具	金銅製	30	不明		舍利孔か 石橋ほか2025
	板状金具	金銅製	18	不明		舍利孔か —
	円形步揺	金銅製	190	I-③・④	「金銅製環珞」	舍利孔か 石橋ほか2025
	柳葉形步揺	金銅製	13	不明		舍利孔か 石橋ほか2025
	棗形步揺	金銅製	4	不明		舍利孔か 石橋ほか2025
	鍛造鈴	金銅製	8	I-④ (①も?)	「金銅鈴」	舍利孔か —
	円形打出金具	金銅製	2	不明		舍利孔か —
	花形打出金具	金銅製	2	不明		舍利孔か —
	半球形金具	銅製	1	不明		舍利孔か —
	円頭釘	銅製	2	不明		舍利孔か —
	銅塊	銅製	2	不明		舍利孔か —
	そのほか	金銅製	3	不明		舍利孔か —
	ガラス小玉	ガラス製	2702以上	I-①・③・④	「小玉」	舍利孔か 田村2016、石橋ほか2026
	トンボ玉	ガラス製	3	I-④	「トンボ玉」	舍利孔か 田村2016、石橋ほか2026
玉類	ガラス勾玉	ガラス製	1	I-③・④	「ガラス製勾玉」	舍利孔か 田村2016、石橋ほか2026
	ヒスイ製勾玉	ヒスイ製	2	I-③・④	「硬玉製丁字頭勾玉」「硬玉製勾玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	瑪瑙製勾玉	瑪瑙製	1	I-③・④	「瑪瑙製勾玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	瑪瑙製丸玉	瑪瑙製	1	I-③・④	「丸玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	碧玉製管玉	碧玉製	5	I-③・④	「管玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	水晶製算盤玉	水晶製	1	I-③・④	「切子玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	水晶製切子玉	水晶製	1	I-③・④	「切子玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	真珠玉	真珠製	14	I-③・④?		舍利孔か 田村2017、石橋ほか2026
	金銅製空玉	金銅製	1	I-③・④?		舍利孔か 石橋ほか2026
	金銅製平玉	金銅製	1	I-③・④?		舍利孔か 石橋ほか2026
	銀製空玉	銀製	3	I-③・④	「銀製空玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
	銀製山梔玉	銀製	4	I-③・④	「山梔玉」	舍利孔か 石橋ほか2026
琥珀片		琥珀	約200	I-④	「琥珀片」	舍利孔か 石橋ほか2024・2026
雲母片		雲母	数枚	I-②	「雲母片」	舍利孔か 石橋2021
③心礎舍利孔を構成する遺物						
舍利孔石蓋	竜山石製	4	I-②	「石蓋」	舍利孔上 佐川2010、廣瀬ほか2026	
④鎌倉時代に新たに埋納された遺物						
舍利内容器	金銅製	1	II	「建久舍利容器」	石櫃 石橋ほか2023・2024	
舍利外容器	ヒノキ製	1	II	「舍利容器外箱」	石櫃 石橋ほか2023・2024	
燈明皿	土製	1	II	「燈明皿」	舍利孔 —	

石田 由紀子 (いしだ ゆきこ)

京都国立博物館学芸部考古室長 / 考古学

Keyword : 古代瓦 古代寺院 瓦生産 藤原京



[略歴]

奈良県生まれ

2001 年 立命館大学文学部史学科日本史専攻考古学コース卒業

2004 年 立命館大学大学院文学研究科日本史学専修博士前期課程修了

2004～2021 年 奈良文化財研究所都城発掘調査部

2021～2022 年 奈良文化財研究所飛鳥資料館

2022 年～ 現職

[主な論著]

- ・「藤原宮造営における瓦生産体制と瓦窯構造」『瓦窯の構造研究』窯跡研究会 (2024)
- ・「変形忍冬唐草文軒平瓦 6647C の再検討」『奈文研論叢』3 奈良文化財研究所 共著 (2022)
- ・「藤原宮の造瓦体制」『古代』141 号 早稲田大学考古学会 2018
- ・「藤原宮における瓦生産とその年代」『文化財論叢』IV 奈良文化財研究所 2012
- ・「縄文原体からみた西日本縄文時代後期前葉の社会構造変化」『関西縄文時代研究の新展開 関西縄文論集 3』 関西縄文文化研究会 2012

「東アジアからみた薬師寺と藤原京」

1. 藤原京・薬師寺造営と東アジア情勢

持統8年(694)、飛鳥浄御原宮から遷都した藤原京は、条坊制を備え、大極殿や朝堂院など主要な宮殿を瓦葺きにした初めての中国式の都城である。新都の造営は、一度は頓挫するものの、天武天皇が即位して間もない天武5年(676)には始動しており、天武11年(682)には本格的に再開された。いっぽう薬師寺は、天武9年(680)、天武天皇が皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒のために発願した寺院である。伽藍は藤原京の条坊に乗っており、藤原京を構成する要素のひとつでもある。

薬師寺、藤原京ともに天武天皇によって造営が開始された大事業であるが、その後天武天皇は病に倒れ、道半ばの朱鳥元年(686)に崩御してしまう。その遺志を引き継いだのが皇后の持統天皇である。薬師寺と藤原京はどちらも天武天皇と持統天皇が主軸となってほぼ同時期に造営されており、両者は密接なつながりをもつ。

この時の東アジア情勢は、中国・唐が政治・経済・文化・軍事とあらゆる面で圧倒的

な力を持ち、朝鮮半島では、唐と連合して百済・高句麗を滅ぼした新羅が 676 年に三国統一を果たしていた。流動する東アジア情勢を念頭に置きながら、天武・持統天皇主導のもと、律令国家体制の構築が着々と進められていった。本稿では、発掘調査や瓦の研究成果をもとに、7 世紀後半の東アジア世界の中で薬師寺と藤原京を位置づけてみたい。

なお、薬師寺は現在まで法灯が続いているが、現在の薬師寺は藤原京にあった薬師寺が平城遷都にともなって養老 2 年（718）に移転したものである。本稿では藤原京の薬師寺（奈良県橿原市）と平城京の薬師寺（奈良県奈良市）を区別するため、前者については本薬師寺、後者については平城薬師寺と呼ぶことにする。

2 藤原京について

藤原京の概要 藤原京は持統 8 年（694）から和銅 3 年（710）までの 16 年間、持統、文武、元明という 3 代の天皇の都となった。一辺約 5.3 km の正方形の京城の中央に、東西 927m、南北 907m の宮室、すなわち藤原宮を配置する（図 1）。

宮の四周に広がる京城には、碁盤の目状に区画された方形街区＝条坊を備え、十条十坊に復元される。条坊道路には一定の規格があり、大路約 16m、条間路・坊間路約 9m、小路約 7m の 3 種類がある。藤原宮の南面から延びる朱雀大路はメインストリートで、約 24m とほかの条坊道路よりも幅が広い。このような条坊道路の様相には、唐の長安城の実態が反映されていると考えられる（井上 2004）。ただし、京の南端付近では朱雀大路や羅城門に相当する門はみつかっておらず、京を囲む羅城も確認されていない。

条坊道路で区画された坊には、皇族や官人が住むための宅地が官位に規定された広さで配給された。また条坊にあわせて本薬師寺や小山廃寺、大官大寺などの寺院が配置され、市の場所は不明だが、出土した木簡の場所から宮の北側にあったと推定されている（奈良国立文化財研究所 1978、岸 1988）。

いっぽう、藤原京の中央に位置する藤原宮は、東西 927m、南北 907m と正方形に近い形状をもつ（図 2）。宮は瓦葺きの掘立柱塀の大垣で区画され、四方それぞれに 3 つずつ、合計 12 の宮城門が開く。大垣の両側には犬走りを挟んで外濠・内濠が設けられた。中央には北から南に向かって内裏、大極殿院、朝堂院、朝集殿が配される。その東西には官衙が配置されていた。

藤原京にみる唐の都城の影響 このように、条坊を備えた京城、瓦葺きの宮殿といった特徴はこれまでの宮都にはなく、藤原京が中国の都城を志向したことは明らかである。ただし、藤原京と同じ形状の都城は中国にも朝鮮半島にも存在しない。藤原京のモデルについては、議論が続いているが、宮を中心に置き、その周囲に京を配置する都城のプランは『周礼』考工記に記された理想の都城の姿と一致する部分が多く（図 3）、これを強く意識したと考える説が有力である（中村 1996、小澤 1997）。ただし藤原京の造営時期は、ちょうど遣唐使の派遣が中断していた時期（天智 8 年（669）～大宝 2 年

(702))と重なり、30年以上唐との正式な往来がなかった。当然唐に関する情報は十分には入ってこなかったと考えられる。こういった状況下のなかで、都城の設計プランに関する情報が不足したため、理念型の都城が先行したという指摘もある(小澤 1997 など)。そのいっぽうで、井上和人氏が指摘したように条坊道路に関しては唐の長安城の影響をみることができ(井上 2004)、正規のルートではないにせよ、何らかの情報は入ってきたものと思われる。

唐の影響は藤原宮の瓦からも指摘できる。藤原宮で生産された瓦は256万枚以上、藤原京全体で341万枚以上にもものぼる(石田・今井 2026)。あくまでざっくりとした試算による参考値ではあるが、藤原京の瓦生産、ひいては都城造営の凄まじさの一端を知ることができる。都城の瓦生産は大量の日本に瓦作りが伝来したのは、6世紀末から始まる飛鳥寺の造営が契機である。この時には百済から瓦工人(瓦博士)が来日し、瓦の作り方を伝授した。この際に伝わったのは粘土板技法であり、桶状や丸太状の型に粘土板を巻き付けたのちに分割して瓦を作る方法である。この技法は中国南朝にルーツがある。いっぽう、藤原宮の瓦生産では、粘土板技法に加えて新規に粘土紐技法を導入した。粘土紐技法は、粘土紐を桶状や丸太状の型に輪積みしたのちに分割して瓦を作る方法である。この技法は北魏や隋、唐など中国の北朝にみられる。

瓦窯の窯構造に関しても改良が加えられた。藤原宮大垣南面中門の約300mに位置する日高山瓦窯は、藤原宮造営のために新設された瓦窯で、藤原宮造営の早い段階に操業していた。ここでは、従来の窖窯に加え、新規に平窯が導入されている(道上・石田 2026、図4-1)。平窯は瓦を焼く焼成部の床面がほぼ平坦な窯である。しゃくしのような平面形態で、燃焼部が小さいわりに、焼成部が広く、なかなか取り扱いが難しい窯構造だったと推定される。焼成部奥には煙道を3つもつ。突如現れるこの特異な構造の瓦窯に類似するのが唐の瓦窯である(図4-2)。特に平面形はよく似ている。そのいっぽうで唐の瓦窯と違って独立した煙室がなく、天井を構築する半地下式であることなど、違いもみられる。平窯や粘土紐技法は、数は多くはないが百済にもあり、検討の必要はあるものの、瓦窯の構造を見る限りは中国の影響が強い(向井 2024、道上・石田 2026)。なお、唐との正式な往来が途絶えていた約30年間は新羅との遣使の往来は幾度とあったが、現状では新羅では同様の構造をもつ瓦窯はみつかっていない。

このことからこの時期に不完全ながらも、唐から瓦作りや瓦窯構造に関する具体的な情報が入って来ており、藤原宮ではそれを意識した瓦生産がされている。唐との正式な国交はなかったとはいえ、新羅との遣使の往来はあり、白村江の戦いの敗戦で唐に連行されていた捕虜が帰国するなど、唐長安城に関する情報が全く入っていないわけではなかった。唐長安城を念頭に置きつつも、天皇を中心とする中央集権国家を体現するものとして、古くから理想の都城とされてきた『周礼』の都城プランをあえて導入したと考えることができるだろう。

3 薬師寺について

本薬師寺の概要 天武9年(680)に発願された本薬師寺は、藤原京右京八条三坊(橿原市城殿町)に位置する官営の大寺院である。現在でも金堂と東塔・西塔の基壇が残存しており、発掘調査で中門とそれに取り付く単廊の回廊が確認されている(花谷 1997)

(図5)。加えて、橿原市教育委員会の発掘調査によって近年南門もみつかった。発掘調査では、中門の下から西三坊大路と条坊側溝に沿う形で掘立柱建物や塀が検出されており、本薬師寺の造営に先行して条坊が敷設されていたことが判明している。つまり薬師寺の造営に先立って、藤原京の建設が進められていた。薬師寺の各堂宇が建てられた順序は、瓦の検討から金堂→東塔→中門・南面回廊→西塔と想定でき、金堂から着手されたことが明らかになっている(花谷 1997・高田 2010・新尺 2023)。金堂は天武天皇が存命中は未完成だったが、天武天皇崩御後の持統2年(688)正月には、天武天皇の法要と関連する無遮大会が本薬師寺でおこなわれており、この時には金堂が完成していると考えられる(大橋 1986)。そして、持統6年(692)には講堂の本尊である繡仏が開眼し、発願から18年後の文武2年(698)に伽藍はほぼ完成する。

本薬師寺と藤原京 本薬師寺は藤原京条坊のなかに取り込まれ、両者は密接なつながりをもつ。薬師寺の所用瓦についても、瓦当文様は軒丸瓦が複弁八弁蓮華文、軒平瓦が変形忍冬唐草文と偏行唐草文と、藤原宮の所用瓦とも類似する(図7・8)。かつては薬師寺所用の変形忍冬唐草文軒平瓦 6647F のひとつが藤原宮所用軒平瓦 6647C と同じ範型と考えられていたが、近年別範と確定した(石田・新尺・中村 2022)。ただし、文様自体は細かい部分まで酷似しており、両者は範型を製作するために同じ下絵を使った可能性が高い。加えて、本薬師寺の瓦を生産した瓦窯である奈良県五條市牧代瓦窯と藤原宮の瓦窯のひとつである牧代近接瓦窯は瓦の焼成や胎土が類似し、製作技法にも共通点がみられる。したがって両者は近接する立地で、工人同士の交流があるような近い関係にあったと考えられる。

本薬師寺の2つの塔 本薬師寺の最大の特徴は回廊で囲んだ中に金堂とその前面の東西に塔を配置することである(図5)。2つの塔は裳腰付の三重塔で、基壇の大きさは一辺が14.2m、高さ1.45mである。心礎は基壇面にあり、東塔の心礎は2m×1.67m、心柱の径0.95m、深さ17cm、下段の舍利孔は円形で径42cm、深さ31cmを測る。これに対し、西塔は出柄式とよばれる心礎で、上面に径38cm、高さ9cmの突起があり、舍利孔はない。出柄式の心礎は奈良時代に多いこと、発掘調査で確認された基壇の工法の違いや、瓦の検討から、東塔が先に造営され、西塔については奈良時代まで遅れる可能性が高い(花谷 1997)。

舍利や舍利容器に関しては、現存していないので、どのようなものであったか不明である。薬師寺に埋納された舍利容器を考える際の参考として、時期的に前後に位置づけられる崇福寺と法隆寺の舍利容器があげられる。いずれも天皇が建立に関わったと考え

られる寺院である。崇福寺は滋賀県大津市にあり、天智天皇によって大津京時代の天智7年（668）に建てられたと伝わる寺院跡である。心礎の側面に舍利孔が開けられ、舍利容器におさめた舍利と無文銀銭や玉類、鏡、鈴などの舍利荘厳具を納めていた（図9）。舍利は水晶3粒で、ガラス製の小瓶に納められ、さらに金製、銀製、金銅製と長方形の箱型の三重容器に入れ子状に納入されていた（図10）。いっぽう法隆寺西院伽藍の五重塔は和銅4年（711）に塔本塑像の完成記事がみられることから、これ以前の埋納と考えられる。法隆寺の心礎は地下式で、上面に舍利埋納孔が穿たれ、その上に銅製の蓋をしてあった。その下から舍利容器とガラスや瑪瑙、水晶などの玉類、海獣葡萄鏡などの舍利荘厳具がみついている。舍利は崇福寺と同じくガラス製の舍利容器に納められ、金製と銀製の卵型容器で入れ子状にし、さらに響銅製の合子におさめ、それを響銅製の大碗で受けていた（図11・12）。このように、舍利容器は崇福寺では方形、法隆寺では円形に変化している。舍利容器は本来、棺をモデルにしたものである。朱鳥元年（686）に崩御した天武天皇は長い殯のあと、遺体は棺に納められたが、大宝2年（702）に崩御した持統天皇は天皇として初めて茶毘に付された。天武・持統天皇が合葬されたとされる野口王墓古墳（檜隈大内陵）には鎌倉時代に盗掘された際の実見記『阿不幾乃山陵記』に石室内の様子が記載されている。猪熊兼勝氏はその記載から天武天皇の棺の棺台が崇福寺の金銅製外箱、持統天皇の骨蔵器が法隆寺の響銅製合子を連想させると指摘したうえで、火葬という葬法の大改革が舍利容器にも反映されていると述べる（猪熊1989、図13）。本薬師寺の舍利容器はちょうどその端境期にあたる。薬師寺東塔が天武天皇を追福するとすれば（向井2026）、舍利容器は棺に似た方形だったのであろうか。それとも舍利孔が上面に穿たれるという共通点からすると法隆寺のような円形だったのであろうか。これ以上は検討材料がないが、興味を掻き立てる。

東アジアからみた薬師寺 本薬師寺・平城薬師寺の最大の特徴は、いうまでもなく回廊内に東西の双塔を配置することである。同じ藤原京内にある官営の大官大寺も、双塔を予定した伽藍配置だったが、文武朝に金堂と東塔が建立された後、和銅4年（711）に伽藍自体が焼失してしまった。このように藤原京内に新造された官寺は双塔の伽藍配置をとる。

本薬師寺の双塔の伽藍配置については、古くから大韓民国慶州市にある感恩寺との類似性が指摘されてきた（奈良国立文化財研究所1987、図6）。7紀後半の新羅では、679年完成の四天王寺を嚆矢として望徳寺、感恩寺など双塔をもつ寺院が相次いで建立される。そのなかでも感恩寺は682年に鎮護国家のために、新羅の文武王が建立したとされる寺院である。両寺院は、双塔だけでなく、東西両塔と金堂の伽藍配置の比率が近似しており、本薬師寺の造営計画には、感恩寺の影響が指摘されている（奈良国立文化財研究所1987）。さらに感恩寺の発願理由を本薬師寺に重ね、鎮護国家の思想が薬師寺式伽藍には反映されているという指摘もある（森1998）。たしかに、感恩寺と薬師寺は

伽藍配置に加え、天皇や王が建立に関わるなど、共通する点がある。ただし、感恩寺は海岸近くの台地上に立地し、塔は石塔、金堂等の建物構造や規模など、異なる点も多い。とりわけ立地の違いは大きい。本薬師寺は藤原京とは切っても切り離せない。上原眞人氏は、双塔伽藍の系譜を平安京までたどったうえで、双塔伽藍の意義が伽藍の荘厳、そして都城の荘厳にあったと結論づける（上原 2014）。非常に重要な指摘である。藤原京を荘厳する要素として、大陸から伝わった最新の伽藍配置である双塔伽藍は大きな役割を果たしただろう。向井祐介氏は薬師寺に代表される双塔伽藍は中国に源流があるとする（向井 2022・2026）。藤原京が唐の長安城を志向していたこと、そして藤原京と本薬師寺との深い結びつきを考えれば、双塔伽藍の造営プランを新羅の感恩寺から学んでいたとしても、その先に見据えていたのはやはり唐の都城だったと考えられる。

おわりに

本薬師寺の伽藍配置は平城遷都後に移転した平城薬師寺にも引き継がれた。中門がやや大きくなったこと、回廊が単廊から複廊へ変更されたことなどいくつか相違点はあるものの、金堂や東西塔の規模や配置は一致する（図 14）。また、瓦に関しても、本薬師寺の創建軒瓦の瓦範を受け継ぎ、擦り減っても彫り直して修繕し、紋様が原形を留めなくなるまで大事に使っている（図 8－6276Aa・Ab・Ac）。平城遷都にともなって、大官大寺や飛鳥寺などの大寺も移転したが、伽藍配置や瓦当文様は奈良時代に刷新されており、藤原京時代の伽藍配置や瓦当文様を踏襲したのは平城薬師寺のみである。そこには、創建当初の寺観を保持するという強い意図がうかがえ、天武天皇の想いを受け継いだ持統天皇の遺志が反映されているようにも感じる。

向井氏は薬師寺の双塔を二聖、すなわち東塔は天武天皇、西塔は持統天皇を追福したものと指摘する（向井 2022、2026）。確かに東塔は天武天皇崩御後、西塔は持統天皇崩御後に完成したと考えられるが、薬師寺式の伽藍配置はいつの段階で決定したのだろうか。再三述べたが藤原京と薬師寺は密接に関連しており、藤原京の造営計画とも関わる。本薬師寺が藤原京を荘厳する要素のひとつならば、京造営の早い段階で伽藍配置は決定していたと考えられる。本薬師寺の造営は持統天皇の病氣平癒が発端ではあるが、藤原京造営当初から京内に官寺を建立する構想はあっただろうし、その際に大陸で流行していた双塔伽藍が念頭にあった可能性は十分ある。天武天皇が発願した段階で、二聖を意識していたのか、それとも天武天皇崩御後に双塔の建立が発案されたのか、この点は藤原京の造営プランの決定時期とも関わる。

いずれにせよ、藤原京と薬師寺は天武天皇と持統天皇の都城であり、寺院であることには間違いない。藤原京は天皇を中心とする律令国家を体現する舞台装置としても不可欠なものであり、その構成要素として天皇自ら発願した画期的な寺院、薬師寺も欠くことのできないものだったのである。

参考文献

- 飛鳥資料館 2013『飛鳥・藤原京への道』
- 石田由紀子 2021「本薬師寺の調査出土の瓦」『奈良文化財研究所紀要 2021』奈良文化財研究所
- 石田由紀子・新尺雅弘・中村亜希子 2022「変形忍冬唐草文軒平瓦 6647C の再検討」『奈文研論叢』3 奈良文化財研究所
- 石田由紀子・今井晃樹 2026「藤原京・平城京の瓦総数に関する一試算」『学叢』48 京都国立博物館
- 井上和人 2004『日本古代都城条里制の実証的研究』学生社
- 井上和人 2008『日本古代都城制の研究—藤原京・平城京の歴史的意義—』吉川弘文館
- 猪熊兼勝 1989「飛鳥の塔心礎」『仏舎利埋納』飛鳥資料館
- 上原真人 2015「双塔伽藍の伝来と展開」『瓦・木器・寺院—ここまでの研究 これからの考古学—』すいれん舎
- 大橋一章 1986『薬師寺』保育社
- 小澤毅 1977「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』44-3（小澤 毅 2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店所収）
- 岸 俊男 1988『日本古代宮都の研究』岩波書店
- 岸 俊男 1993『日本の古代宮都』岩波書店
- 新尺雅弘 2023「変形忍冬唐草文軒平瓦 6647C・F に関する基礎的考察」『考古学研究』70-2 考古学会
- 中村太一 1996「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』582
- 奈良国立文化財研究所 1978『藤原宮木簡 1』
- 奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
- 奈良文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展—古代律令国家の創造—』
- 奈良文化財研究所 2016『奈良文化財研究所紀要 2016』
- 花谷 浩 1997「本薬師寺の発掘調査」『佛教芸術』235 毎日新聞社
- 法隆寺国宝保存委員会 1954『法隆寺五重塔の秘宝の調査』法隆寺
- 高田貫太 2010「本薬師寺の創建軒平瓦」『古代瓦研究V』奈良文化財研究所
- 道上祥武ほか 2024「日高山瓦窯の調査—第 213 次—」『奈良文化財研究所発掘調査報告 2024』奈良文化財研究所
- 道上祥武・石田由紀子 2026「瓦窯の構造」『日高山瓦窯発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 向井佑介 2020『中国初期仏塔の研究』臨川書店
- 向井佑介 2024「中国における唐代以前の瓦窯構造」『瓦窯の構造研究』窯跡研究会編 真陽社
- 向井佑介 2026『仏塔伝来—東アジアにひろがる古代寺院』吉川弘文館
- 森郁夫 1998『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局

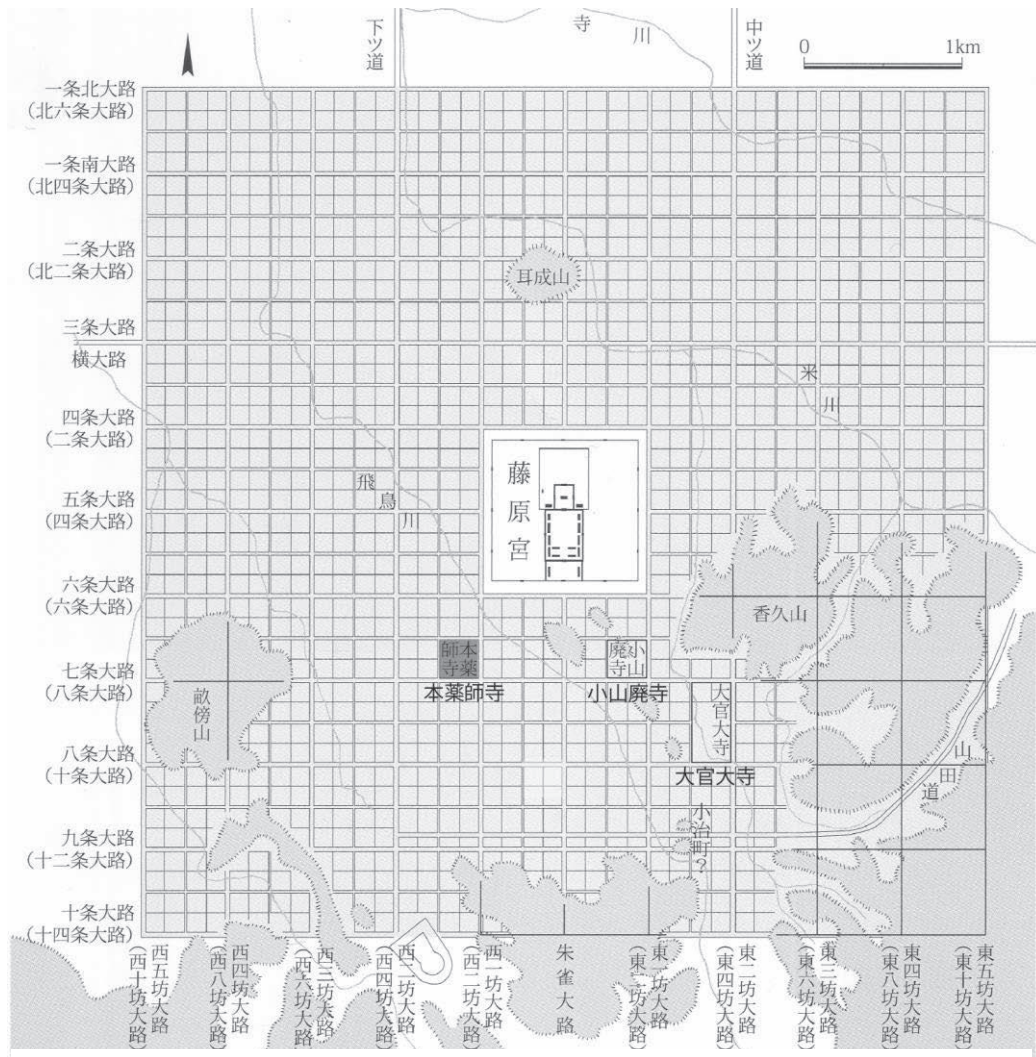


図1 藤原京復元図 1:50,000 (飛鳥資料館 2013 に追記)

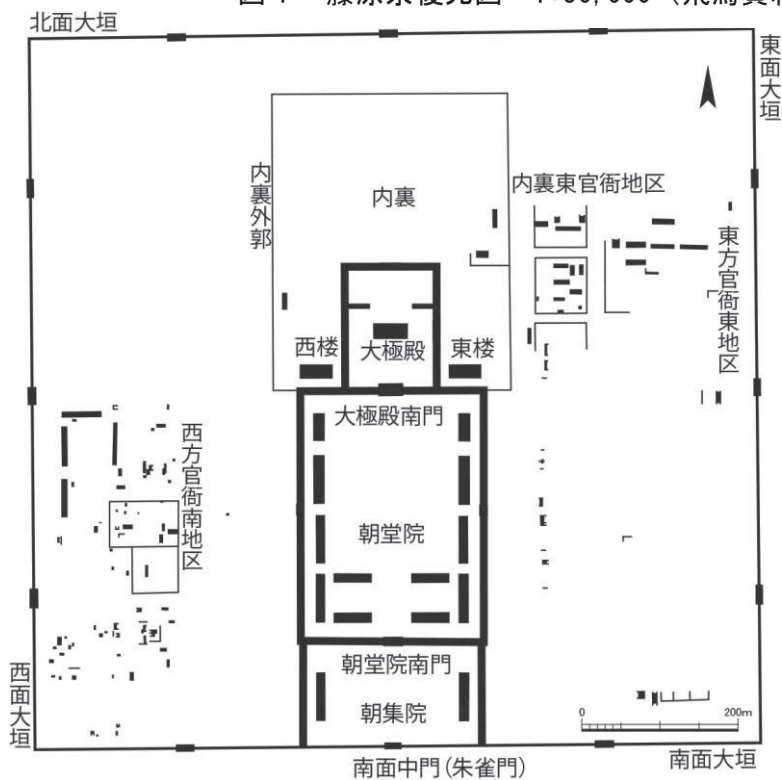


図2 藤原宮復元図 1:10,000 (奈良文化財研究所 2016 をもとに作成)

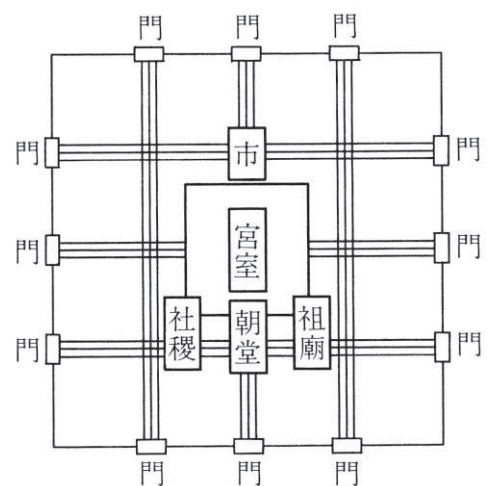
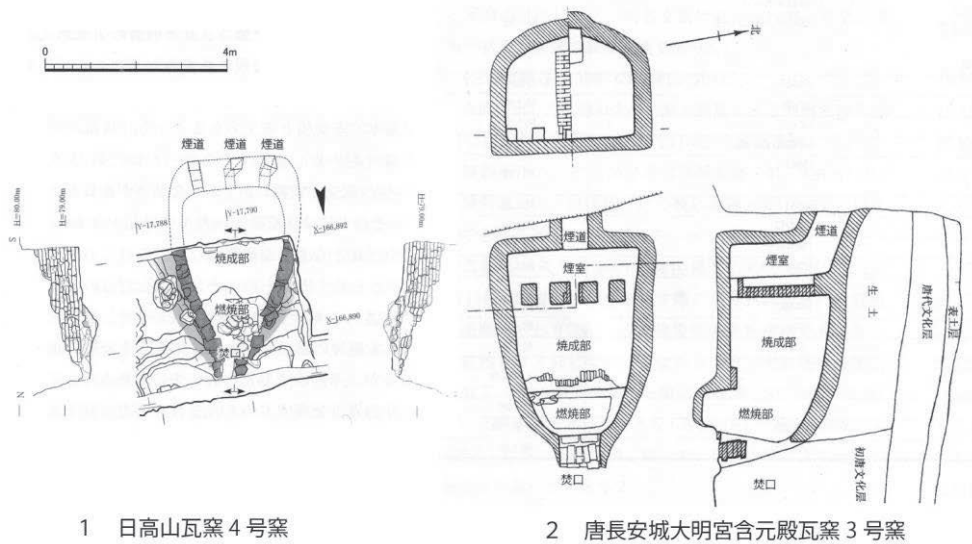


図3 周礼型都城概念図

(岸 1993)



1 日高山瓦窯 4 号窯

2 唐長安城大明宮含元殿瓦窯 3 号窯

図 4 日高山瓦窯の平窯と唐長安城の瓦窯 1:150 (道上 2024 から抜粋・追記)

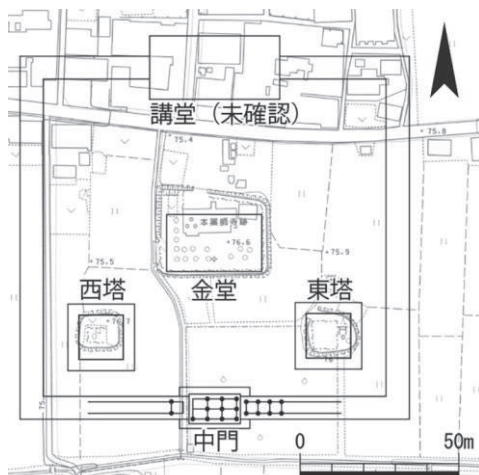


図 5 本薬師寺の伽藍復元図 1:2,500
(石田 2021 をもとに作成)

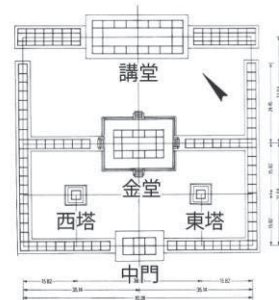


図 6 新羅感恩寺の伽藍復元図 1:2,500
(奈良国立文化財研究所 1987 に追記)

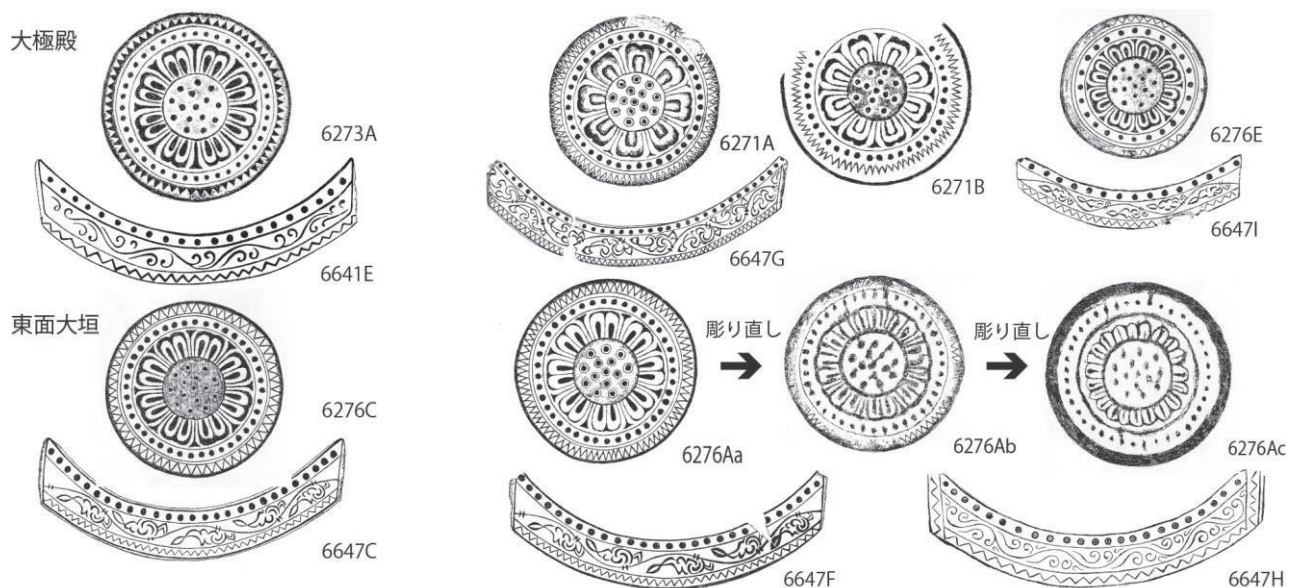


図 7 藤原宮の所用軒瓦 (一部) 1:8
(奈良国立文化財研究所 1996 をもとに作成)

図 8 本薬師寺の創建軒瓦 1:8
(奈良国立文化財研究所 1996 をもとに作成)

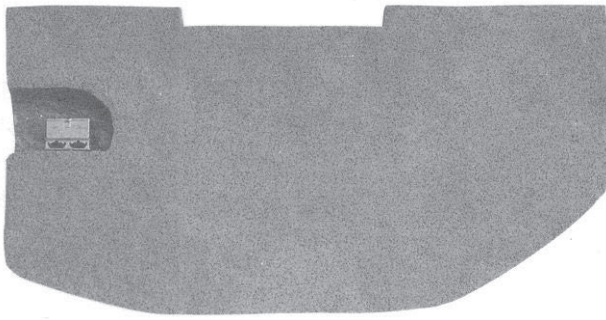


図 9 崇福寺塔心礎と舍利容器納置の様子
(飛鳥資料館 1989)

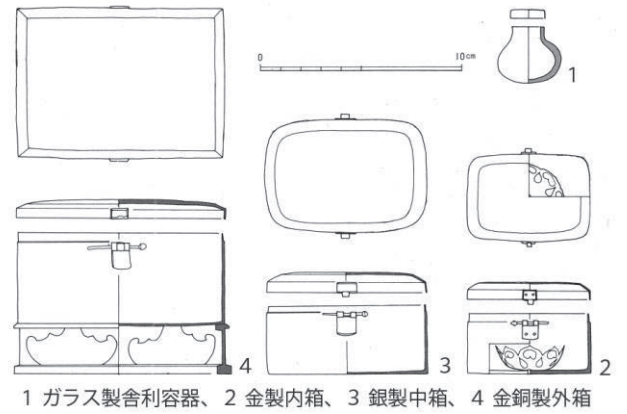


図 10 崇福寺跡出土舍利容器 1:4
(飛鳥資料館 1989 に追記 現品は近江神宮蔵)

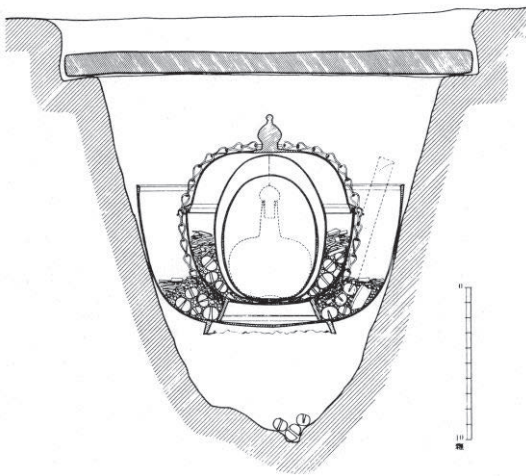


図 11 法隆寺五重塔塔心礎と舍利容器納置の様子
1:50 (法隆寺国宝保存委員会 1954)



図 12 法隆寺五重塔塔心礎埋納品 (模造)
(東京国立博物館蔵、出典：
ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>))

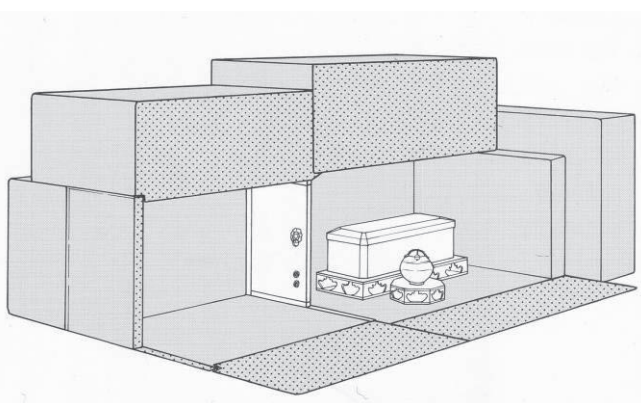


図 13 野口王墓古墳 (檜隈大内陵) の石室模式図
(奈良文化財研究所 2002)

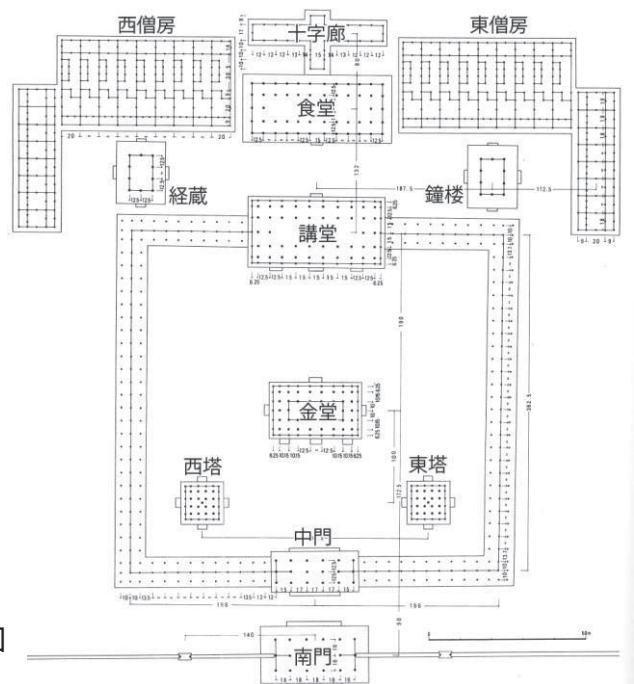


図 14 平城薬師寺の伽藍復元図 1:2,500
(奈良国立文化財研究所 1987 に追記)

濱田青陵と郷里の岸和田

「僕は退官をすれば、郷里の岸和田へ帰って小学生に考古学を教えるのだ。君も適当な時期に狭山に帰ってそうしろよ。」

そう語りあつた考古学者たちがいた。日本考古学の先駆者、濱田耕作（号・青陵）とその弟子の末永雅雄である。濱田は大正十一年に『通論考古学』を出版し、考古学を「考古学は過去人類の物質的遺物に拠り人類の過去を研究する学」と定義し、日本考古学の基礎を築いた。

濱田は明治十四年に岸和田藩士だった濱田源十郎の長男として生まれた。出生地については明らかではない一方、本籍地は岸和田並松町六〇二番地となっており、旧藩士の家柄である、濱田の郷里は岸和田である。少年期のほとんどを岸和田で過ごした。十二歳の時は元岸和田藩士の福井楠喜の私塾である豫像館へ入る。また大阪府立第一尋常中学校（現・大阪府立北野高等学校）に入学するが、トラブルを起こした友人をかばったことで放校処分となり、上京する。

早稲田中学、東京帝国大学を卒業したのちヨーロッパ留学を経て、考古学へ。日本国内だけでなく、朝鮮半島、中国大陆といった場所まで調査を行った。京都帝国大学で日本初の考古学研究室を開設し、後進の育成を行い、日本考古学の発

展に大きな足跡を残した。

濱田は青年期を東京で過ごし、岸和田とは離れた生活となる。そんな濱田の意識を郷里へと向かわせる出来事が起きた。二十二歳の時、父、源十郎が病に伏したのだ。精力的に看病を行うが、治療の甲斐もなく、源十郎は息を引き取る。その時、濱田が記した『喪父記』には父を失った嘆きの言葉と共に「岸和田」の語が多く見られる。

そんな濱田の郷里への想いを伝える言葉が末永雅雄の回想記に残されていた。それが冒頭の言である。しかし、「退官したら岸和田へ帰る。」と語った想いは京都帝国大学総長在職中に急逝したため実現することはなかった。

末永は昭和六十年に岸和田を訪れ、濱田の想い、願いを伝えた。そして岸和田市、朝日新聞と手を携え、昭和六十三年に「濱田青陵賞」を創設した。

郷里への想い、次の世代へ考古学を伝えたいという願いは、濱田青陵賞として今も受け継がれている。

